と稱するセエン・フランソア教會の僧數名を、余が地に派遣せられんことを祈請する所なり。蓋し余は殊に此教會の僧を愛敬するを以て、陛下の幸に此僧等に恩遇を加へ、其成功に補益あるの事は、擧て之に施與せられんことを願ひ、余も亦弊州に著するを待て、終始之を保護し、爲めに寺院を設立し、力を極めて仁惠を附與せんとす。陛下若し猶ほ聖教擴充の爲め必要と斷定せるとあらば、幸に之を我國に設置施行せられよ。余は此に一事の請ふべきあり。敢て望むらくは、陛下更にプレラ職の僧一員を命ぜられ、其熱心に因り、我州民をして悉く耶蘇教に教化せられんことを。其費用と寺領とに至りては、余優に之を寄附供給すべきに因り、陛下の憂慮を煩はさゞるなり。」（政宗が羅馬法皇に呈せし書）

是等の文を見るに、政宗も亦大友小西高山内藤等の如き、熱心の信教家に類す。是等の書は、彼が領内に羅馬教を擴めんとして、西班牙王と羅馬法皇とに協力を請ひたる者と認めざる可からず。左れば使節の一行六十八人は、墨斯哥に於て受洗し、使節支倉は、西班牙國都に於て受洗し、法皇を拜して、羅馬教徒の嘗足禮を行へり。是れ豈に德川氏が峻法酷刑を以て、教徒を殄滅せる時代に於ける一種の奇現象に非ずや。是れ必ず別に裏面の消息無かるべからず。予後篇に於て獨眼龍氏の本意は、此文面以外大に企畫する所ありしことを觀察せん。

一一

伊達政宗が卑辭厚禮、羅馬の教廷に使節を派して、其領内に布教の便宜を開かんと進言せしは、德川氏が内に向て厲禁を發し羅馬教徒を殄滅せし時にして、共に慶長十八年に在り。伊達氏は德川氏に最も親善にして、嘗て政宗の爲めに豐臣氏の譴責を解緩せしは、家康の力にして、關ヶ原の役に家康が後顧の患無かりしは、政宗の力なり。而して家光が諸侯を臣隷に准せしむるの一轉機は、實に政宗の發議に決せり。此の如く互に親善なる關係を有しながら、德川氏の厲禁を無視して、外教

を領内に保護せんとせしは、最も奇異の現象と言はざる可からず。政宗の眞意果して何くに在るや。

惟ふに政宗の人となり、健鬪善戰の一武將に非ずして、壯圖一世を蓋ひ、覇を天下に爭はんの志を懷ける梟雄なり。彼が容易に豐臣氏に服せざりしも、關ヶ原の役に上杉氏と鬪ひしも、皆此野心の抑へんと欲して抑へ得ざりし結果に過ぎず。唯彼の聰明、德川氏の基業大に定まるを洞看して、雌伏するに決したるなり。然れ共其局外に奇功を博すべき者あらば、生來の機心豈大に動かざらんや。彼れが使を海外に遣りしは、焉ぞ是によりて諸國の形勢を視察し、遠征を企つるの擧に非るなきを知らんや。島津氏が德川に請ひ、琉球を伐ちて領地を擴めしは、慶長十四年に在り。政宗是等の擧を見て其心を動かしゝを知るべし。其遣はしゝ正使ソテロは、江戸に於て僅に刑戮を免れし者、政宗弘敎の爲めに哀を請はゞ、德川氏ソテロを宥して政宗に交付せざりしは必然なり。左れば此遣使は、內に對しては交通の名儀を藉りて德川氏の許諾を得、外に對しては、信敎に托して彼國の歡心を得、因て以て形勢を視察せしめたる者にして、政宗の胸中、遠略の志を蓄へしこと知るべきなり。此機微は、隱然彼れの書中に見ゆるが如し。

「貴府と印度との間は、航海者の屢々來往する所なりと聞く。且つ此船長は航海の術に於て甚練熟したる者の由。因て貴國と我國との間、航渡するを得るや否、航海中依るべき港嶼ありや、又寒暖の度如何等を熟知すべきにより、其船長に就て親く航海の術を學習せんと欲す。切に我國に渡來あらんことを希望す。若し我國より貴國へ航するを得ば、每年我國の船舶を貴國へ回送し、懇親の情義を通ずるに甚便利ならんと信ず」（政宗がセヴイル府尹に呈せし書）

「余又西班牙大王の所領に屬する呂宋は、我國を距る甚遠からずと聞き、呂宋及び其耶蘇敎諸州と交際を通ぜんとを切望するに由り、此に併せて陛下の威に因て其志を遂げしめんとを懇請す。顧ふに陛下若し助力を惜まずんば、其事必ず成る

を得ん」（政宗が法皇ポールに呈せし書）

見るべし、政宗は一面に於て、歸敎信仰の態度を示せど、他の一面に於ては、地理形勢を視、航通往來を開くに在りしとを。抑此兩面の何れか獨眼龍氏の眞面目なる乎。嗚呼、予之を左に揭ぐる彼れの詩に斷ずるを得ん。

邪法迷レ人唱不レ終。欲レ征二蠻國一未レ成レ功。圖南鵬翼何時奮。久待扶搖萬里風。

想ふに、彼れは宗敎に歸依するには、狡獪に過ぐる英雄なり。彼れをして東北に生れしめずして、中國に人と爲らしめなば、一大諸侯に甘せざる人格なり。此種の人にして羅馬の敎廷に卑辭拜跪せんと、別に期する所の目的存せしと斷じて見るべし。然るに支倉の羅馬より歸朝して、海外の形勢を復命せし頃は、德川氏鎖港の政略確定し、又事を外國に生ずべくもあらず。而して政宗の野心も亦齡と共に銷え、悠々泰平を歌ふに至れり。「馬上青年過、時平白髮多、殘軀天所レ許、不レ樂又如何」とは、彼が此境遇を賦せし者なり。海外遣使の顚末、此の如くにして、我國と羅馬敎との

關係全く絕えたり。

二七　結　論

連篇記せる如き事蹟を以て、舊日本はジェスウィット派に紹介せられたる羅馬加特力教と絶縁し、鎖國政策により、政交貿易を遮斷して、二百餘年を經過したり。故に我國人の腦底に印する耶蘇教なる者は、彼の隱謀を挿める危險の邪教觀にして、基督教の名は、政教を混同せるジェスウィット派加特力、即ち切支丹の記臆を回想せしむるに至る。其聯想は外國を見て夷狄と爲し、人をして仇敵の思を懷かしめたるも、亦自然の結果と言はざる可からず。豈唯我日本のみ然らんや。彼に於ても亦同一の原因を有して、同一の結果を生じたり。英人が加特力教の系統に、王位の繼承を拒むの法律を設け、(千六百八十九年)、又同教徒に信任の職務を授けず、(千六百六十七年の法律)、議院に入るを許さず、(千六百九十一年の法律)、武器を携ふるを禁じ、(千六百九十五年の法律)、新教徒と結婚するを禁ずる(千七百〇八年の法律)等、新教國が舊教徒に對するの態度、往々今人意想の外に在り。是れ皆舊教が政權を宗教に混同したると、社會が寛容の度量を缺きたると綜合の結果なり。當時文明の程度に於ては必然の制度にして、又其事の治安の爲めに緊要なりしことを追認すべき理由なきに非ず。然れ共進で止まざるは社會の大勢なり。其後文明の上進は自由の氣象を高め、舊教徒は昔日の危險なる性格を一變し、新教國も亦寛大の政見を持するに至り、信仰自由の說、新舊兩教徒の情を融和して、舊教徒剝權の條章次第に法典より削除せられ、今日に於ては王位繼承制限法獨存するのみにして、他は皆一掃せられたり。以て古今人文の變化を見るべし。

歐洲大陸の諸國、前世紀に憲法政治を實行してより、一般に此風潮に驅られて、皆信仰自由の主義を見認むるに至れり。是れ唯政見進步の結果のみに非ずして、文明が個人と社會とに寛容の氣象を養ひ、互に他の信仰を强るの理に背き害あるを認識し、各自良心の自由を保全すべき眞理の開發せられたる惠賜とす。而して各國之が

爲めに危險を感ずるの虞あることなし。

然れ共國民文明の程度によりて信仰自由の程度を異にせり。信仰の自由を確保し、其主義明確にして、最高の域に進めるは、米合衆國にして、其反對なるを西班牙、葡萄牙、露西亞の諸國とす。是れ其政治の然らしむるのみならず、其文明に高卑の差あるによるなり。

我國五十年前再び政交を海外に開くに際し、之を媒介せし者は新教國にして、而かも其信仰自由の主義を確認し、之を實行する米國なりき。政交貿易共に同國の紹介によりて、危險の歴史を經ず、以て今日の發達を致し、之と同時に其平和にして、且政權に關係なき新教先づ我に入りたり。是れ久しく外教仇視の思想に養はれたる我國人も、漸次新教の性質が、舊時渡來の者と異なるを認識したる所以にして、五十年間宗教的衝突なく、寛容の氣象を保ちつゝ進行せしは、彼我の幸と云ふべし。惟ふに信仰自由の主義一とたび見認めらるゝときは、尋思考索も亦は自在なるべき

自然の結果なり。故に一定の化石的信條を以て人心を錮し、甲の信仰を以て、乙の信仰を抑ゆることは到底爲す能はざる所。ルーテル此自由主義を唱へて、羅馬の鐵索を截斷し歐洲に新天地を開きたる以後、宗教の進化速度を加へ、駸々として社會を振蕩し來れり。故に今日の基督教は、既にルーテル、カルヴィン、ズウィングリ、ノックスの基督教に同からず。若しルーテル等の所信を一定不動の正宗となし、之に殊なる者を異端視せば、今代の基督教徒多くは異端たらざる可からず。之を異端として迫害を事とせば、ルーテルが羅馬教に對したるの抗議、今人の口を突て出で、以て地下のルーテルを罵ると、彼れが嘗て法皇を罵れるが如くならざる可からず。

信仰の自由は轉て信仰の進化を意味すること、上來述ぶる所の如し。社會も個人も互に之を寛容するときは、宗教善く人心を開發して、其本來の面目を發揮すべく、而して之が爲めに危險を生ずることある可からず。想ふに我國人此理を會得し、寛容以て外教を待つことあらば、外來の基督教は漸化して我國の基督教となるべし。儒佛

既に然り。基督教豈獨り然らざらんや。其歐米に發達せし儀式信條は、基督教其者に非ると、恰かも支那印度に生暢せし禮儀宗律が、儒佛二教其者に非るが如し。斯くて將來の基督教は、自ら詭異特質の服裝を脱して、單純通性の日本基督教とならざる可からず。今日の儒佛は、既に支那印度の儒佛に非ず。將來の日本基督教は英、米の基督教に非るなり。唯仁と慈悲とは、支那、印度、日本の儒佛を貫きて彼我相殊ならざるが如く、宇宙を御し萬物を支配する唯一の神、萬國を聯ね人類を和する無限の愛は、彼我の基督教を一貫し、國によりて異同ある可からず。基督を中心として、敬神愛人の崇高なる觀念を發揮する者、是れ其の根本教義なり。

予は寛厚包容の氣象を有して、此信念に立つ所の基督教徒を歡迎せんと欲する者なり。

日本と露西亞

三刊序

露國の膨脹は勢なり。勢は之を利導すべくして、制止すべからず。予は、我國人が豫言者的活眼を開て大勢を洞看し、以て東洋經營の大方針を畫せんことを望む。本書を草するの微意、實に此に存せり。初刊一月にして盡き、再刊亦三月にして、書肆三刊を促し來る。世人の鄙說を雲烟過眼視せざるとを見るべくして、著者の勞徒爾に屬せざるを覺ふ。仍て本年一月毎日新聞に掲げたる朝鮮經營論を附錄として、剞劂に附す。

明治三十四年三月

沼南しるす

再刊序

本書初刊の篇を校せるは、本年八月に在り。時に、聯合軍尙未だ北京に入らず。故に唯對露の方針を披陳せしのみ。對淸の意見は別に之を述べんと欲し、其旨を序中に一言せり。數日の後、聯合軍北京に入りて、列國對淸の問題、時論の中心となれり。仍て予の意見を草して、之を毎日新聞に連揭す。今之を輯め、一校して再刊の附錄と爲す。本書發兌以來僅に一月、刊本早く盡て、書肆其再刊を促す。世論が此問題に集中するの一斑を見るに足れり。私見世論に影響を與へて、問題解決の資に供せられん歟、著者の滿足豈之に過ぐるとあらんや。

明治三十三年九月

著者しるす

自序

書を覽ること博からず、勢を察すること審ならず、臆測空談、以て時事を斷ぜんとするは、是れ政治家の信を世の得ざる所以にあらずや。奇聞異說を搜索して其材料の多きに誇り、曾て時務を解決して世事を指導すると無き、是れ讀書家の重きを社會に爲さゞる所以なり。嗚呼、此の如くにして、世論の歸宿を求めんとす、抑亦難し。然れ共其れをして世の利害に關せざらしめば則ち已まん。日露關係の問題の如きは、國運と民利とに關する一大問題なり。而して世論紛々、人をして五里霧中に彷徨せしめ、何人も起て其解決を試る無し。予平生深く憾とす。明治三十二年四月、時事に感ずるあり。「國民の沈思を促す」と題して予の宿論を每日新聞に掲ぐること、通じて十有九回、竊に國民の誤想を破りて、其省悟を冀へり。翌年六月、團匪北淸を擾りて、中外恟擾し、英字新聞屢りに日露開釁の兆あるを傳ふ。

予因て「日露の二國互に誤解を去れ」と題するの文五篇を草す。文中重複の所あるは二年に渉りて、毎日の紙上に其稿を累掲したるによるなり。今之を訂正して、小冊子と爲し、改題して「日本と露西亞」といふは、共に二國の關係を論じたるものに係ればなり。

歐西列國の東洋に於ける勢力は、地勢に限られて、必しも本國の大小弱强と比例せず。唯英國は海上の力と殖民とを有するの故を以て、遠方に國するに拘はらず、東洋に重きを爲せり。我國人は露國の兵力を視ると其實に過て、却て英國の實力を眇視せり。予其然らざるを辨じて、人多く之を信せざるなり。外人が支那を分領するは、決して得策に非ず。「我日本は割壤の拙策を取らずして、須らく經濟的に經營すべし。」と。予平生此說を擧げて、我國人に告ぐ。而して多く之を悅ばざるなり。本年六月、團匪の變起れり。出師の便は、我日本を第一とし、英國に次ぐ。露人は、唯多數の兵を出す能はざるのみならず、其嘗て占領せし土壤の保安に苦む狀あり。予是に於て前說の空言に非るを、世人に示すを得たり。今や聯合軍北京進行の途上に在り。秩序恢復の後、列國如何なる策を大陸に行はんと欲する乎。予竊に說あり、別に之を論ぜんと欲す。

平和を經とし、商工業を緯とす。是れ日本國民をして健全に膨脹せしむる所以の政策なり。本年五月中、毎日新聞上に公にせし殖民新論は、日露關係と相待て、平和政策の一斑を示すに足るを信ず。本篇の附錄となす。

明治三十三年八月　　島田三郎識

緒言

明治二十七八年の日清戰役に於て、非常の感に打たれたるは、露國政府なり。三國干渉の發議主動者は、露國政府なり。我國民が此干渉に憤激し、思慮なき自國誇大の情を動かし、敵慨の心を發したるは事實なり。自己の勢力を張るに熱中し、國家の大計に通ぜざる軍人と、國民の感情に從ひ軍人の勢力に憚る政治家が、此機會に於て軍備擴張の聲を揚げ、以て無謀の設計を立てたる爲め、大なる禍根を內外に遺せるは、識者の夙に慨嘆する所にして、財政の困難上下を惱むるは、吾人更に之を繰返す必要なし。然れ共、吾人は之が爲めに國際の交誼を害し。且東洋の天地に一點の雲翳を留め、機に觸れて霆轟轟裂し、幾千萬の幸福を破らんことを恐る。是吾人の、我國民に警告し、以て禍機を未然に防がんと欲する所以なり。國際の交情を妨ぐる所以の者種々あり。直接利害の衝突するは、原より其重大なる者なれど、

此他相互感情の誤解より來たる者亦甚少しとせず。而して人種の異なる、宗教の同じからざる、皆歴史に顯著の影響を生じ、意外なる禍害の原因となることあり。英佛の軋轢は、利害原より衝突する所あるに由りしと雖、チユートン、ラテン人種の異色、プロテスタント、カトリックの異宗、亦其交情を阻害したり。幸に仁人達者の啓發によりて、英佛古來の阻害は、今世紀に及び著く減殺せられて、眞の利害相容れざる事件の外、唯感情一片の爭ひは之を除くを得たり。東洋に於ける日露の間、眞個利害の點に於て、吾人其衝突を發見せざるなり。其相容れざるが如く感ずるは、畢竟相互の誤解にして、局に當る者、百年の利害を大觀せば、勉めて此誤解を釋くに力を致さゞる可からず。而して世の論者も、亦大に意を此點に注ぐべきに、不幸にも從來の經歴は之に反し、日露の當局、兩國の論者たゞに之を啓發開導せざるのみならず、却て之を助長するの形迹あり。是れ吾人が今に於て、此妨害を除却するに務めんと欲する所以なり。

第一　舊思潮の外國觀念

我國民が多年鎖國の夢を結びしより、其結果海外諸國を夷視するの思想國内に充滿したり。此思想は、往時何の國と雖も免れざる所にして、一も此時期を經過せざる者あらず。外國てふ辭が敵國てふ意義に解釋せられたるは、各國古代の思想を徵すべき明證なり。而して交通を遮斷せる邦國に在りては、他國の文物思潮に接觸せざるの故を以て、たとひ他の思想大に開發するも、外人敵視の舊思想は獨永續すべし。是れ其地彊犬牙錯綜し舟楫往來する地中海沿岸の諸國が、早く外國敵視の時代を經過し去りて、之と正反對なる我日本が、永く此思想を保有し、今日尚ほ未だ其舊窠を脱せざる所以なり。蓋し其原因は、春秋内尊外卑の主義を皷吹せる支那文學に薫陶せられたると其一なり。德川氏の鎖國政略が、一切外國の思潮を杜絶せると其二なり。嘉永安政以後攘夷の說熾にして、論者多く宋元の歴史を引き、歐對米

日本の關係を斷じ、中間大に覺る所ありて國是一變したりと雖、維新改革の一半は、原と鎖國家の運動に出たるが爲めに、一旦大勢定まるの後、舊思想の回歸すると其三なり。此の如き經歷變遷の爲めに、今日尙ほ外國の二字に向ひて、古來遺傳の感想あるを免れず。其根柢の誤想は、種々の變相を顯現し、甚しきは對外思想と敵愾思想を混同し、自誇他蔑を愛國の觀念と誤解するの徒、亦之れ無きに非ず。而して其事實に發する有害の結果は、外交阻害の運動と爲り、無計算の軍備擴張と爲る、皆此蠻想遺存の發動に外ならざるなり。而して我國民が尤嫌惡の妄想を有する者は、諸外國中露國に對する敵愾心にして、吾人は其甚だ國計を過つの禍源たらんことを恐るゝ者なり。

吾人の觀察によるに、日本國人中露國を猜忌する者甚多し。而かも其然る所以を問へば、茫漠として捕捉すべきの根據ある者少し。予輩の見る所を以てするに、彼等の猜忌は、理性の觀念より來る者少く、古來の傳說、一般敵愾の舊思想、英國支那文學の影響、日露兩國々民の誤解等、其多分を占むる者にして、眞に利害の打算、兩國の形勢より來るに非るなり。予輩は斷言す、日露兩國は毫も爭鬪の必要無く、協同して東洋を經略するの運命を有する者なりと。是れ決して予輩の想像に非ず。事實に根據せる眞面目の觀察なることを信ず。

第二　傳說より來る對露の猜忌心

予輩は日露の關係を利害の點より論斷するに先だち、何故に我外國拒斥の舊思想が特に露國に向ひて劇きかを考ふるに、英米諸國が我に通交するに先ち、首として鎖國の夢を破りしは露國なり。文化年間貿易を請求して容れられず、憤恚して我北邊を騷がせしは露國なり。其國土我邊疆に接して、夙く外侮防禦の觀念を我に與へしは、英米佛に非ずして露國なり。藤田東湖が其著回天詩史に外警を論じて、「西洋諸國萬里來航する者は客兵なり。一時猖獗を極むるも、我陸土に居りて持久するの利あるが故に、畢竟大憂深患に非ず。唯露國は、一海峽を隔てゝ、我が北邊に逼る者、是れ他日の深憂なり」と言へり。此の觀察は、一東湖の見にあらずして、實は水戸派の外國觀なり。當時水戸派の外國觀は、取りも直さず、我武士學者政治家、概言するに愛國志士の外國觀を代表すと評せざる可からず。溯りて其以前を求むるに、近藤重藏間宮林藏の如き豪傑が、太平社會の醉夢を驚破して、外國の觀念を日本國民に警告せるは、英に對するに非ず、米に對するに非ず、況や普墺ならんや、唯北邊に勃興する露帝國の勢力に對する者たりしなり。

其由來此の如し。我國民が、外人は敵人なり外國は敵國なりと觀じたる鎖國時代に於て、先づ耳にせる外國は、米英普墺に非ずして露國なるときは、今日に至り、露國の名を聞きて、舊想社會が特に異常の感に打たるゝ者、偶然に非るを知るべし。予輩が傳說より來るの猜忌といふは、卽ち是なり。

第三　支那文學の影響

支那の文學は、外人拒斥の思想を鼓吹せしのみならず、特に露人憎惡の思想を我國人に傳染せしめたり。支那古來の歷史は南方の侵犯を受たる事迹なくして、終始北方に苦められたり。獵狁は周公の北征を勞し、犬戎は幽王の社稷を覆し、始皇は北虜に對して長城を築き、漢は終始匈奴に苦しめられ、晉は遂に五胡に中原を亂られ、六朝唐五代、何の時か北方の患無からん。遂に宋に至りて金に破られ、元に滅さる。支那の文學歷史は、外人拒斥の主義を春秋に發し、北狄畏るべきの思想を歷代の事實に長じたり。夫れ我日本の文學は、支那文學の日本化せる者にして、特に德川氏の代に及びては、漢儒其創業の制法に參與せしが爲めに、武士文字を解せざるが爲めに、事苟も外交に關する者は、悉く儒者の議を經ざる者なく、國初の外交公文は一切林氏の手に出でたり。鎖國の行はれし以後の國交は、支那朝鮮に止まり

しを以て、此時代の儒官は外交家にして、漢文は外交文なりしなり。新井君美が朝鮮聘禮を改定し、林衡が對馬に韓使を迎へしが如き、其實例とすべし。此時に當り、通商と通交とは全く別事にして、支那朝鮮には通交あり、荷蘭には通商ありて通交なし、故に國交の思想は、全く漢文に支配せられしなり。彼の三千年來、北方に苦められ遂に北狄の馬蹄に蹂躙せられし支那の歷史を、誦習せる外交家が、我國際の形勢を考ふるに當り、北虜畏怖の聯想を懷けること、他の外國より更に甚しかりしは眞に故あるなり。藤田幽谷の歲旦の詩に、「春來一夜斗回ㇾ杓、北顧復患胡虜驕」と　是れ露國南進を慮る者にして、此詩は米使の到來より數十年前に賦せし者なり。是等の事實を觀察し來るに、日本國人は、諸外國の中に就て、露國を忌むの思想を、支那文學に涵養せられたる者にして、今日多數の人々が、學不學を問はず、他の歐洲諸國よりも露國を畏れ、露國の二字を耳にして異常の感に打たるゝこと、偶然に非るを見るに足らん。

第四　開港以後の彊遇

不幸にして開港前後の彊遇は、我國人多年の忌疑を實にするが如き事實を續出したり。抑我に向ひて開港交通を促がせしは英露の二國を以て先驅となせしかど、皆其目的を果さずして、彼我の間に憎念を增加せしが、就中其甚きは露國なり。文化元年、露船長崎に來りて通交を求む。其容られざるが爲めに使節憤恚して自殺し、船員報仇の念に驅られて、同三年蝦夷を犯し、幕府北邊を警めて、明年松前奉行を置けり。其明年英船長崎を掠めて、海內是より外寇防禦の觀念を發したり。其後英露二國の船邊海に出沒したるも、未だ其宿志を遂げざるに、米國橫合より使節を差向け、談判功を奏して開港の端を此に發す。此時に當りて、米の外交家は、英露諸國の勢力を巧みに利用し、速に米國と和約を訂せざれば、戰を好むの英露到ると說き、以て自國平和の政略を誇張して、英露好戰の事を對照縷說したるは、外交家の

伎倆左もあるべし。而して一方には英淸の阿片戰亂あり。以て我國人が英を畏るゝの念を長じ、引續きて英佛の二國露を討つの戰あり、其餘響東洋に波及して、英露の二艦我伊豆の近海に戰はんとし、露兵又對馬に上陸したることあり。幕府之に退去を命じたるも、露人應せず、英露相惡きの故を以て、英人幕府を援けて以て露兵を撤退せしめたり。是より以後、我國人が外國に對する感情は、米國に親く、英佛を畏れ、而して露を嫌忌するの念は、英佛よりも太甚き者ありき。且樺太彊界の談判は、幕府の世を終る迄、紛爭の中に埋められ、維新以後に及びて、漸く千島交換の約成れり。左れば我國人は、北虜南進の疑念を强むるの事迹に遭遇するのみにして、曾て之を弱むるの歷史を見ず。今日學と不學とを問はず、國人が茫漠の間に露國を嫌忌し、大なる誤解を兩國の間に生ぜしこと、決して偶然に非るを知らん。

第五　英文學の影響

歐洲の大勢を我國に報知せし第一の機關は、和蘭文にして、寛政以後の幕府の當局、特に其の密報を聞くを得しが、之によりて大に我國人の視聽を驚動せしは、歐洲に於けるナポレオン戰爭の始末、東洋に於ける支那戰爭の始末を以て、其尤顯著なる者とす。是より以前、歐洲治亂の我國に於けるは、殆ど月界の坤球と相關せざる者の如し。抑露國が歐洲に一大勢力と見認められしは、英露普墺等が共同してナポレオンを驅逐し、維納に會して列國の彊域を議定せし時に剏る。是れ露國が西歐に尊重せられ、又畏怖せらるゝの一大紀元なり。阿片の亂は、我天保十三年に結局したるが、越へて十六年、我安政四年、支那再び英佛と事を搆へて、兩國の軍北京を陷れ、此亂に際し露國中間に周旋したるが爲めに、其報酬として黑龍江一帶の地を割て、露國に屬するに至れり。故にナポレオンの戰に於て、露國は勢力を歐洲の中原に伸べ、支那の亂に於て、露國又東洋に彊土を擴めたり。是等の戰報は、初め蘭人の告知によりて、我國人を驚かし、次ぎに英米人の通報によりて、之を詳にするを得たり。左れば歐洲諸國が、從來輕蔑せし露人に對する感情は、一變して、猜忌の念となり、特にバルカン半島及び印度に於て、兩雄對峙の形勢を成したる英國は、露國を忌むの情、他國より甚き者あり。而して英語の新聞雜誌、悉く英人の情を以て露國を解釋したるが故に、之を讀むの日本國人は、知らず識らずの間に英人の思想を其腦中に印刻して、對露の猜忌を養成したると亦少しとせざるなり。會澤憩齋の新論、世界列國の大勢を周末の七國に擬し、英を齊に比し、露を秦に比し、露を以て狼心ある國と爲せし者、亦此一例なる無からんや。

クリミヤの役は安政元年に在り。卽ち米使我に來航せし翌年にして、此戰役は安政二年を以て平和に歸す。是れ歐洲擧つて露國を敵視せし時にして、我開港恰も此際に在り。全歐一齊に露を無道の國と爲せし時に際し、我日本初めて世界に紹介せ

らる。故に露國の名が我國人に惡感情を與へしと、遠く諸國の上に在るは、自然の勢にして、爾後續々我に入るの報告は、英文によらざる者殆ど稀なるが故に、此感情は年を逐うて濃厚を加ふるも、之を稀薄ならしむる者絶えて無くして、以て今日に至れり。支那文學の爲めに、外人を憎惡し、外國を敵視するの感情を養成せし我國人は、英文學の爲めに露人を憎惡し、露國を敵視したると、恰も同一の彊遇に立つことを覺らざる可からず。此一段の見解を胸中に蓄へて、而る後初めて日露關係の眞相を談ずることを得んとするなり。

第六　露國の歐洲に對する關係

露國の文明は實に幼稚なり。彼得帝以前は、歐洲の中原より夷視せられたり。露帝はモスコビアの蠻酋と輕蔑せられたり。彼得帝一代の辛苦經營、夷を變じて華と爲さんと欲し、文物、技藝、兵制、法度大に變改せられしと雖も、其廣漠の土、多數の民、今日に至るも尚ほ未だ野習を脱せず。唯其大國の故を以て畏憚せらるゝと雖、其文化の度を察するに、尚ほ幼稚の國たるを免れざるなり。而してバルカン半島に抗衡し、印度の背面に爭鬪し、埃及の方面に交渉するの英國が、其事實關係より、露國に不快なるは、當然の事にして怪むに足らず。英人自信の念極めて厚し。此念は一轉して自尊他卑の念となる。故に宗教人種政體を異にして、特に自由の理を解せざる露人を夷視し、好戰疎野の蠻人なりと斥くるは自然の情なり。英人の或る者は、今尚ほ露人を評して、彼等は文明の服裝せる韃靼人なりといふに至る。以て兩國人

の一般關係を推知するに足るべし。英廷が土耳其援助の政略に過たれて、此五十年間、一回は露國と實戰し、一回は開戰の決意を表したり。此の如き關係歴史を有する英國が、露國を猜忌し、露人を嫉視するは、人情免れざる所なりと雖、我日本は、曾て露國と爭はざる可からざるの關係歴史を有することなし。其之あるが如く考ふるは、初めに支那の文學に過たれ、次ぎに英國の文學に醉へる謬見妄想のみ。此妄想は一變して誤解となり、誤解一進して事實の爭論となる無きを保つこと能はず。是れ吾人が根柢に溯りて之を打破し、更に實際の形勢に論及して、以て國民の沈思を促さんと欲する所以なり。

第七　英露の誤解漸く去らんとす

吾人は篇を累ねて、我國民が露國を誤解する所以の由來を述たり。然れ共此の如き誤解は、日本のみならず、誤解を我に傳へたる英國の誤解は、更に我より太甚しく、其實害を英露二國に被らしめたること測る可らざるなり。哲人其間に起るありて、常に其非を鳴らし、英民に警告したりと雖も、不幸にして多數の容るゝ所とならず、空く知言の名を留むるのみ。然れ共眞理は年代と共に光明を加へて次第に其勢力を增し、バルカン半島に於ける英露の關係は、全く舊時の面目を變じ、中央亞細亞の疑問も、殆ど爭鬩を絶たんとし、支那に於ける二國の對抗は、世人をして太平洋の波濤を捲かんと疑はしめしも、遂に英露協商となりて局を結ばんとす。是れ百年以前、ボルク等が英人に開示せし豫言的政略の、實にせられたる者に非ずや。吾人は日露兩國の誤解を破らんが爲めに、英國の誤解が如何に禍害を二國に被らし

め、而して多年經驗の後、漸く二國協同の新紀元を開ける歴史を此に略述せんと欲するなり。

多數の英人は、今日も尙露國の南進を疾み、其西侵を患ふ。然れ共先見の士は、百年以前既に露の患ふるに足らざるを豫言したり。世人多くは、土を援けて露を防ぐを以て、英國不易の國是と信じ、又歐洲の太平を保つは此策の外に非ずと思ひ、野心的政治家バーマーストーン、ヂスレリーの幻影政略を艶稱すと雖、是れ百年以前の歴史と、爾後の經過を知らざるの陋見に坐す。千七百八十三年露國クリミアを併せ、其後八年、ビット露の南進を畏れて、土を援けんとするの議を國會に唱へしに、ボルク首として之に反對し、グレーはボルクの說を贊して、露の決して敵とす可からず、土の決して援く可からざるを切言し、以てビットの發議を破れり。此時に當り、英國々民は露を天然の敵國と誤解せざりしなり。ナポレオンの歐洲を亂すや、英露提携して之を破り、希臘が土の虐政に抗して起つや、英露協同して其獨立を援けたり。此時に當り、二國の間曾て仇敵の感あらざるなり。其相疾むや、實にバーマーストーンの功名を好み、佛と共に土を援けて、クリミアを擊つの時に初まる。蓋し英人印度を略定して、露國中央亞細亞を經略し、直ちに印度の背後を衝かんことを畏れたるに出づ。是れ英人が土を援けて露の鋒を挫き、土を以て英の外郭に利用せんとするの計策を立たる所以なり。是の失計は、畢竟中央亞細亞の地勢を知らずして、露の南進に鬼胎を懷けるの過ちに出づ。夫れ土の援くるに足らずして、露の畏るゝに足らざるは、ボルク之を百年以前に豫言し、コブデン、ブライト之を五十年前に明示し、グラッドストーン之を二十年前に詳說す。不幸にして一世の迷夢を破る能はざりしと雖も、歴史のパノラマは自然に展開して、是等哲人の先見に違ふこと無く、就中クリミアの役に流せし血は、英國に何の利益を與へず、何の痕迹を留ずして、唯多額の公債を國民に遺せしのみ。史家マッカルシー評して曰く、「今日英國の責任ある公人にして、彼の不幸なるクリミアの戰爭政略を非難せざる者

恐くは一人もあらざるべし。此戰爭は、英國に一の利益を遺さずして損失禍害を生せしのみ」と。抑も英國が此の如く既往の對露政策に失敗し、苦き經驗を嘗めたる後、初めて漸く協同の得策たるを覺りし所以の者は他なし、全く露の眞想を誤解し、露の勢力を過想せしに基因せずんばあらず。夫れ露の勢力は、進で以て印度を脅すに足らず、土の腐敗は援けて以て英の利とするに足らず、中央亞細亞は、却て露の力により、夷より化して華に近づくの利益あり。之を約言するに、露は其自然の形勢によりて黑海の沿岸を經略し、中央亞細亞を懷柔し、支那の北邊を開拓し、英も亦た自然の形勢によりて、印度埃及より支那の南邊を經略し、兩國の利益嘗て相衝突するを見ざるなり。近時支那の方面に於て兩國が終に協商を成したる所以、亦此方針に外ならざるなり。英京龍動に永住せし露國の某夫人、嘗て英人の擧動を冷笑して曰く、「英人年々其土境を各方に擴めて、其帝國を大にし、曾て他國の面前を憚らず。英國は海上に威力を振ひ、其富は何物をも求めて得ざること無し。露國は英國の富を有せざるなり。何の故に自信あり勇氣ある英人が、想像の爲めに理由なき恐慌を起す乎。嗚呼、予をして英人たらしめば、地球上何の邦國を畏るべき。畏懼する英人は、自ら顧みて其怯懦を恥ざる乎」と 近時英人漸く自覺する所あり、ボルクの後百年、コブデン、ブライトの後五十年にして、英露協商の方略を實にす。吾人は其覺醒の遲きを惜むも、亦覺醒其事を慶せずんばあらず。

第八　英露必す協商に至らん

一般の英人は、露國を好戰國（ウオーア、ライキ）と非難し、又其國民を侵掠國民と攻擊す。然れ共此非難は、獨之を露國に加ふべきの非難に非ず。波蘭（ポーランド）の分割は、蠻野の擧動たるを免れずと雖も、而かも此擧は墺普の二國亦露國の罪を分擔せざる可からず。匈牙利（ホンガリー）を蹂躙して其義軍を覆へせしは、殘忍の擧として人道の非難を受くるも、墺は實に其主にして、露は却て其從たり。土耳其の無道を伐ちて、希臘（ヘルレス）の遺民を救はんとするは、予輩露の非謀として之を非難する能はず。若し之を非なりとせば、エリサベス朝の時、英國が西班牙と戰ひて、ネーゼルランドの獨立を援け、ブルボン朝の時、佛人が英軍と戰ひて、米國の獨立を援けしも、亦之を非義の暴擧と言はざる可からず。歐洲の史家、皆英佛二國人の此擧を義として、之を艶稱しながら、獨り腐敗彼れが如く、殘忍彼れが如く、改良の目的百年以來絶え果てたる彼れが如き土耳其の暴虐を援け、憐むべき希臘（ヘルレス）の遺民を俎上の肉として、却て露の救援を非難するは、吾人の決して是認する能はざる所なり。英人と雖、深沈公正なる者は、皆此方針を取れる英國の失計不義を論ぜざるなし。フルードは近代英國史界の大家なり。彼れクリミヤの戰を評して曰く、『千八百五十四年の役は、英國の方針を過てる第一著歩なり。予は當時より今日に至る迄、終始其擧を非とす。果して其結果の年に非なるを實驗するに非ずや』と。

惟ふに英露の間、初より誤解無かりせば、バルカン半島をして早く土耳其の虐政を脱して、小獨立國を分立すること、尚ほ希臘（ギリシヤ）國の如くならしめしならん。假令此に至らざるも、半獨立の諸國成立して、英露の二大勢力を限界し、墺獨も亦露と接觸衝突するの患なく、半島の人民蘇息の運を開きしなるべし。今や幸に此方針に向ひて、此方面の衝突は最早過去の歴史となり了りぬ。

中央亞細亞に至りては、露の土彊を開くこと自然の順序にして、是亦他國の強て

非難すべきに非ず。此地方の土民は、廣漠の原野に散處し、嶮山幽谷の間に索居し、慓悍にして懷く可からず、露人の外之を文明に誘ふ者あらざるなり。歐洲の中原より見れば、露の文明は實に幼稚なりと雖、中央亞細亞より之を見るに、露は立派なる先進文明の國と謂はざる可からず。恰も日本は歐洲の後進國なりと雖、東洋の先進國として、朝鮮開導を自任するが如し。故に此方面に於ける露國の南進は、之を非難する能はずして、英國の先覺は夙く此理を見認むるなり。英人ヂクソン此關係を評して曰く、『露人はキヴア、ボクハラに南進すべし。英人は何故に之を非難し、之を忌嫉する乎。英人は躬から法律秩序を世界に立て、文明を宇内に布かんと各方に向ひて進發しつゝあるに非ずや。ボクハラに於ける露人は、同地に於ける英人の如きのみ。道路之が爲めに開け、橋梁之が爲めに立ち、荒原を往來する各方の旅客異色の人種、皆其便を分受するにあらずや』と。マッケンジーの論は更に精確なる者なり。曰く、

『露國は法律秩序を解せざる蠻族を懷柔したり。露人は蠻民に高き文明を敎へざるなり。是れ蠻民が高き文明を受くるの資格無きと、露人自己が之を有せざるによる。露人の武器は到處に奴隷を廢したり。露人の土蠻に對するや、苛刻にして往々殘酷に涉ることあり。然れ共是より以上は、露人之を解せず、蠻民之を受けざるなり。而も概言するに露人の感化は、其下に歸したる土蠻の利益となりたり。』

以て中央亞細亞に於ける露人の狀態を見るべし。而して英人が其南進を疾視するは、露人の大に服せざる所にして、英人は遠く海を隔つる印度を征服しながら、無主に等き曠原を疆國の接地に經略する露人を以て無道なりと云ふは何事ぞと、抗言しつゝあり。英人は佛人と戰ひ、蘭人を逐ひ、葡人を斥け、又土人と鬪ひて印度を取れり。露人は如此き爭を爲して、中央亞細亞を經營せず。然るに英人が露人を好戰の國民といふは何事ぞと抗言しつゝあり。若し土彊を擴るを以て、露人を非難せば、

今世紀に於ける英人は、露人よりも更に多くの土疆を擴ろめたりと抗言しつゝあり。若し戰ひを以てせば、五十年間英人は二回支那を伐ち、一回露國を討し、埃及と戰ひ、アフカン、ズールー其他各地の小闘枚擧に暇あらず。好戰を以て露國を非難せば、英の好戰豈露の下に在らんやと、抗言しつゝあり。故に吾人若し道義の標準を執て二國の主張を審判せば、其是非果して何れに在るを明言すること能はず。左れば公正なる英人は、領土の擴張を以て露國を攻撃せざるなり。ファラー曰く、『近き百三十年間、英國は二百六十五萬哩、人口二億五千萬を收めたり。是れ濠洲其他征服によらざる總ての領土を除きたる者とす。露國は同年間に、百六十四萬二千哩、人口千七百十三萬五千を收めたり。是れ英國が征克せし人口の十五分一に過ぎざるなり』と。

聰敏なる英人は、露人が印度を衝くの說を信ぜず、又之を畏れざるなり。エルレンボロー卿曰く、『印度政府は天然の疆界が、印度領を構成するを以て限域となし、宜く其一般の平和、酋長の保護、同盟者の一致、其人民の幸福に全力を盡すべし。ボンジャブ、インダスの兩河、アフガンの山脈、其獰猛の土蠻、皆英軍と共に西方の進軍を阻隔して、二者互に直接することあらざるなり』と。マッコールも亦曰く『印度を伐つは、五十萬の陸兵を要す。是れ露の動かす能はざる所なり。假りに二十萬の兵を用ゐるとせよ、運搬の爲めに四十萬の駱駝、三十萬の馬匹、百五十萬の人夫を用ゐざる可からず。誰か此事の實現を期する者あらんや』と。

以上記述する所を一見して、靜慮沈思せよ。實際の形勢より利害を斷ぜば、露が印度を襲ふの說は信ず可からず。而して英露の遂に協商に至るべきは、聰慧なる人士の決して疑はざる所なり。

第九　誤解の結果

露國が歐洲諸國に疎外せられ、特に英國に誤解せられたる過去の事實は、其儘我國に傳來し、鎖國空氣の中に成長し、多年支那文學に涵養せられし我國民をして、恐露病に懼らしめたること、此に年あり。此病根は、時に臨み機に觸れて、日露の感情を阻害し、有害煽動の文字を出し、危險卑怯の狂人を生じ、露人をして日本國民を忌疾憎惡せしめたり。而して日清戰爭の闌なるや、輕薄の論者無謀の武人、何の思慮も無く支那蹂躪を絶叫し、燕京衝くべし、四百餘州席卷すべしと、世界の氣連も日本の位置をも顧慮せず、調子に乘りて狂進したり。此時に當りて韃靼民族が歐洲を蹂躪せし古史を追想し、日本の國民を誤解し、日本の國力を過想して、危險の思を爲したるは、露國のみに非ず。現に獨乙皇帝は偶意の圖畫を作り、歐洲聯合の力を以て、新興の好戰國を懲伐すべしとの意を、露帝に暗示したりき。此時に於て

東洋の形勢を審にしたるの故を以て、毫も此畏懼心を發せざりしは、唯英國のみ。就中露國は其土疆を支那に接して、直接の危險を感ずることは獨乙の比に非ず。日本の言論文章、常に恐露病の兆を有するは、露人の好意を以て迎へざる所にして、前年露帝來遊間の出來事は、日本君民の誠意眞情によりて一旦拂拭せられしと雖、一度疑念の露國君民の間に生ずるに當りては、忽ち平素の文章、過去の變事を想起して、日本憎惡の念となり、遂に三國干涉の事件を惹起したり。是れ二國が冷靜なる理性の判斷よりして相惡むの關係に非ず。二國國民の耳目開發せずして、望外の空想を誇張し、妄りに猜疑を逞くして內に畏懼心を懷くの結果、互に其眞相を誤解したるによるなり。而かも誤解は、寒天の雪の如く、嘗て融解することなく、次第に積重し、忽ちにして空言の臥薪嘗膽となり、其結果は無謀の軍備擴張となり、彼れ一段の疑惑を長ずる毎に、我も亦一層の懸念を增し、佛の軍人をして「露は日本の軍備完成に先だち一大打擊を加へんと欲す」と評せしむるに至る。佛の軍人の評

言は、是れ其人一個の評言として見る可からず、歐人中同一の意見を懷く者あらん。露人皆日本擊つべしと思はざるべきも、露國中此迷想を懷く者あらん。而して日本國民も亦之に對して慮らざる可らず。之を慮る者の中に二種あらん。(甲)國民の心を啓發し、二國の形勢眞に爭ふべき根元無きを明にして、誤解を破る者は、文明を助くる者なり。(乙)彼疑へば我之に備へざる可からず。彼兵を增せば、我も亦軍を張らざる可からずと、主張する者は、蠻風を煽で、東洋を禍亂の中に投せんとする者なり。吾人は乃ち斷じて言はん、露國は憂ふるに足らず、日露兩國は爭ふべき原因なしと。

第一〇　露國畏るゝに足らず

吾人は斷言す、日本若し中世以上の蠻風を煽ぎ、朝鮮を略し、支那を取り、大陸の中央に旭旗を樹つるを以て、我國民の理想とせば、日露の利害は東洋の海陸に衝突せん。然れ共此場合に於ては、唯露國が我敵たるのみならず、歐の諸國皆我を敵として日本に反對せんとす。吾人は確信す、如何に野蠻の遺風を脫せざるも、明治三十二年の我國民は、此狂躁の非計を爲さゞるとを。若し東洋の平和を保持し、內は農商工業を振作し、有無を通じ、支那大陸を我產物の市場となし、四億の民衆を我顧主と爲し、更に露の領民を以て、我商工の顧主と爲すの大規模あらば、彼我共同の利路に進むべきは、吾人の決して疑がはざる所なり。

予輩は假りに議論の便宜の爲めに、露國は大に我を誤解して、我を打擊するに意ありとせん。我能く天然の限域を立て內治整肅せば、露は獨力を以て我を如何ともする

こと能はざるを確信す。見よ明治二十八年、日本軍隊が北進して燕京を衝かんと聲言し、此誇大の聲言に露人を驚かせし時、露廷は畏怖の感に打たれて、密議を開きたるも、其獨力を以て日本を脅かすを得ざりしに非ずや。若し獨佛の協同を得ざれば、露國は空く煩悶して口を開かざりしならん。亦以て露國が東洋に於ける勢力の程度を窺ふに足るべし。我日本が恐露病に罹りて、妄りに露國を畏怖するは、冷靜の頭腦を有する者より之を見るに、殆ど常識以外の判斷と評せざる可からず。然れ共日本の國是、中世以上の蠻風を追ひて大陸侵略にありとせよ。其敵は露の一國に非ずして、實に歐洲共同の敵國を目前に現出すべし。

是の如くんば、五十萬の陸兵、原より日本を保全するに足らず。百萬の兵を養ひ、國力を消盡し、人民を飢餓せしむるも、決して其空想を實にする能はざるべし。故に吾人をして現時の日本を論ぜしめば、其安危は我國是如何に決す。曰く天然の限域を守り、人道の至正によりて、獨立の基礎を鞏くし、民と休息して平和を四隣に擴むるの大果斷あらば、軍備の擴張を爲さずして國安を保ち國富を增し、以て萬國の中に尊敬せらるべし。若し又之れに反して、神國は萬國に君臨すべしとの舊思想を脱せず、妄りに自ら尊大にせば、中國を以て居りたる支那の覆轍を踏むべく、漫に豐臣氏の殘暴を艶稱して、征克を國民の理想とせば、軍備を擴張して熊貔百萬を擁し、艨艟支那海を壓するも、何の得る所なくして、民は窮し國は危からん。予輩故に露國の兵備を畏れずして、我國民の蒙昧不義、軍人の無謀跋扈、政治家の無智怯臆、是れ最も我國の畏るべき者なるを信ず。

第一一　日英露の關係

我國民は英文學に誤られて、露國の眞相を見ると能はず、一方には露國を世界唯一の好戰國と爲し、一方には露國の勢力を過想して、畏怖の念を懷くと太甚し。吾人を以て之を見るに、露國が土耳其を伐ちしは、宗教を同くする希臘民族が、虐政に苦むを憫むの同情より來る者にして、英國に於ける進歩思想の政治家が、之を非とせざること、今日に初まるに非ず。吾人は一々其言を擧げず、單に其太名を列記して足れりとすべし。フオックス、ボルグ、グレー、ケンニング、コブデン、ブライト、グラッドストン、モーレー、ハーコールト、皆此中に在り。是れ豈其智利害を見ず、其情英國に薄き者ならんや。之に反して、英國が二回支那を伐しは、何の理由かある。道光の戰は阿片の貿易に起り、咸豐の戰は、逃亡の支那人を、英旗を揭けし支那船に隱匿したる件に起りしに非ずや。阿片の亂は、今に至る迄、英人の羞辱とする所なり。罪人隱匿の件は、戰爭の理由に非ずと、英國々會に非難の聲を發せる者ありき。吾人は原來英文學を喜ぶ者也。自由の精神、英文學の中に充溢し、健全の氣象、英文學によりて皷吹せらるゝを見認むる者なり。吾人は又アングロサキソン民族を愛する者なり。彼に忍耐豪邁の性あり、兼て天を畏れ道を信ずるの心あり、家族の組織鞏固に、國民の氣風純潔にして、團結の好風あり、概して之を言ふに、今日文明の上流に居る者なり。吾人が其好所を見認むること此の如し。然れ共其嘗て印度に、支那に、バルカン半島に施せる政略を贊成する能はず。又露國を待つの方策を是認すること能はず。此點に於て、吾人の見解は、蓋し我國多數者の說と反對するならん。我國は英文の誤れる報道批評を、其儘に採用して、英國が東洋に有する現在の勢力と、其東洋に於ける過去の歷史を解せざるに似たり。英國の東洋に兵を用ひ、東洋の領土を掠めたるは、遠く露國の上に在り。近時其商業の利益を害するを憚りて、平和を好むに至れるは、吾人之を信ずと雖、若し一旦戰を爲すに決意せば、獨

力を以て東洋の波瀾を捲くに足る者は、歐洲の列國中、唯一の英國あるのみ。其の領土は印度及支那に在りて、其戰艦、其富資、其要港、到る處戰を爲すに備あるは英國を除きて他に何の國あるや。露國は其領土こそ東亞大陸の背面に横はれ、其の根據は遠く裏海の邊に在りて、廣原千里、地荒れて人少なし、所謂張弩の末、魯縞を穿たざる者、十萬の兵を東洋に用ゐんとするも、恐くは彼れの難とする所。其海軍に至りては、尙ほ大いに整へりと言ふ可からず。其海港は四時皆通ずる者あらず。其富資は戰を爲すに優なるに非ず。何に因て安りに我平和を脅すことあらんや。故に苟も戰ふに意ありとせば、露は少くとも佛の同意を得ざる可からず。而して英の單獨、能く自在の運動を爲す者と、日を同くして語る可からざるなり。我國民漫に英を以て永年平和の者と過信し、露を以て地球唯一の好戰國と過想するは、二國の眞想を解せざるによるなり。

スペクテートルは、英國の智識社會に愛讀せらるゝ有力の雜誌なり。其嘗て掲げたる文に「日本が萬國の平和を握るの武裝を爲し、亞細亞固有の蠻風を吹鼓するは世界文明の害なり。歐洲諸國を協同して其好戰の蠻風を打擊破碎せざる可からず」と道破したることあり。此口氣は、日英同盟を夢みる日本國民の迷想を破るに足るべくして、英國一部の論者は、純乎たる東洋的日本よりも、寧ろ歐洲文化の光に接觸せる露に協同し、日本若し好戰國民たらば、之を撻つに躊躇せざるの意あるを察すべし。予輩は一スペクテートルの論を把りて、全英國民の心なりと誣る者に非ず。然れ共我國民が日英同盟容易に成べしと妄信し、是によりて地球表面自然の勢を回轉し、武力に因て露の南進を制禁せんとするの失計を覺るに足らん。我日本飜て天時人事を察し、天地の大道に基き、敬愛信義を旨とし、自ら治めて十九世紀の氣運を順用せば、英露米佛獨伊皆友邦として、我國運の隆昌を期すべし。若し一つの無道國、其中に出るあるも、我內整ひて外に援あり、以て無道を撻伐せんこと、決して難きにあらず。若し妄りに戰爭侵略の古政略を夢み、大陸を領有するの野望を懷か

ば、多數の我國人が同盟成るべしと夢想する英國も、亦怙むに足らざるを思はざる可からず。且吾人の見を以てするに、日本國民は、貿易的に社交的に、勢力を大陸に有するを望むべきも、強て政治的疆界を支那に擴むるを欲す可からず。假りに其分野を保たんと欲すとするも、北方には關係極めて薄くして、却て南方に緣故多し。福建省不割讓の如き、其適例に非ずや。此點より觀察するに、交渉は寧ろ英佛諸國に在るべくして、毫も露に關係せざるなり。亦以て我國人が妄りに露人を嫌忌するの迷想たるを覺るべし。

第一二　武力を以て領土を擴張するの迷想

我日本、由來平和的殖民の歷史を有せずして、國人皆戰爭的横領の古事を記憶するのみ。抑戰爭的横領の國土擴張は、結局之を保持すること困難にして、皆失敗に終れるを猛省せざる可からず。武力の唯一の方略と理會せる蠻野の時代に於てすら、武器によりて得たる領土は永年其の保有の成功を見ざれば、況してや國民的運動の今世に於て、武力的擴土の成功せざるを覺らざる可からず。而かも幼稚思想の我國人は、今日尙ほ過去の歷史に醉ひ、廿七八年の役に於て其本來の性情を外に洩らすや、神后豐公の遠征を追懷歌謠せしに過ぎず。而して世間輕薄の論者政客、國民を開道誘掖するに眞理正道を以てせず、却て此弱點を利用し、其迷想を煽起し、以て國家を危險の渦中に陷れんとす、豈深慨に禁ゆ可けんや。

上古は茫漠たり。請ふ中世以後世界の歷史を見よ。國民の膨脹力によりて領地を擴

めたる者は、永く之を保持せる繁榮の歴史を有し、劫掠侵取によりて國土を拓ける者は、忽に得て終に之を失へる失敗の事蹟に非るなし。西班牙の西大陸を横領するや、兵火メキシコ、ペリユー固有の文明を夷滅して之を取りしも、結局寸土を米洲大陸に保つ能はず、近時西印度の諸島をすら失ふに至れり。且其保有する時代と雖、徒らに本國の累となりて、其の繁榮を助けざりき。英の米洲大陸に於ける、初めは國民の移住に起り、其繁殖成長に及び、政府これが支配を爲し、其根柢深く領土に入りて、今日アングロサキソン民族の大國民を現出し、本國に屬するカナダ領あり、分立せる合衆國ありと雖も、要するに兄弟國民を形成して、其繁榮を天下に擅にするは、平和的膨脹の成果にあらずや。吾人史を讀みて、ヘルナンド・コルテースがメキシコの土民を殘害し、血を流し家を火にして、其の文明を夷滅し、貨を掠め民を奴にして國土を奪ひたるを見、之をウキリアム・ペンが一切の鹵掠を禁じ、合意の契約を以て土地の讓與を受け、能く平和を土人と殖民の間に保持したるに對照し、西

班牙と合衆國の榮枯盛衰が、遠く四百年の前、拓土開殖の基礎相異なるに豫定せるを思ひ、以て天道の成算あることを信ぜざる能はず。ウキリアム・ペンが現時のペンシルヴァニアの基礎を立てたるが如きは、殖民歴史の高崇敬虔なる者にして、永く後人に人道を教ゆるに足る者とす。而して此一帶の殖民地は、今日合衆國繁昌の中點、文明の高處として、世界に尊敬せられ、メキシコは早く侵掠國民の手を離れて、今尚文明低度の國土たるに非ずや。

此他印度の殖民に於ける、世人多くは英政府の武器によりて、英國の版圖に歸したりと誤想すと雖、其根元は遠く千六百三十年頃、私人たる英民が印度に貿易の基礎を立てたるに在りて、英民繁殖し、貿易擴張せられたる平和的歴史に初まり、中期に至りて、殖民の競爭より佛、蘭、蒲と鬪ひ、蒙古と戰ひ、又印度の内亂に關係して、其一派を助け、以て他派と戰ひ、其結果印度屬地の版圖を定むるに至りしなり。然れ共其重なる戰爭卽ちクライブの指揮せる者、其苛刻なる政治卽ちヘースチングの

施設せる者は、皆印度商會の下に行はれて、英政府が直接に武器を操りて克服したる者に非ず。我國人が、英國が印度を征取したりとの言を聞て、之を豐臣氏が朝鮮を征克したるが如くに解釋し、征克の結果領土を擴張し、之を保有し得る者と速了するは、畢竟亞細亞流儀の征史を記憶せる無學無識の結果に外ならざるなり。且つ領土を永久に擴張保有するは、內に道義の養あり、外に平和の象あり、之を行るに商工業の力を以てせざれば其成功決して期す可からず。英人の印度を保有するは、クライブ、ペーチスングの武力政治による者少くして、却て之を矯正して殘害を減じ善政に導ける正人義士の力、其多きに居るを覺らざる可からず。ヘーチスングの土酋を虐待したるや、英國は彼れの功業を見認むるに拘らず、其擅制非義を攻擊し、千古の快歷史を遺せるボルク、フォックス、シエリダンの徒あり。コブデン、ブライトが人道正義を唱道して、非政を改革し、以て印度人民をして英國に親ましむるの道を開ける者、是れ英國が永く印度を保ちて、東洋に無比の寶庫を有する所以の實歷史なり。我國人が漫に領土の擴張を夢みて、曾て國民の平和的膨脹を計らず。武器を準備し、民力を耗費し、以て商工業を萎靡せしめ、道義を蔑視して、徒らに好戰國民の名を取らんとするは、其愚憫むべく、其失計實に太息深慨せざる可からざるなり。吾人は現代の最大殖民國たる英國が、米領を開き、印度を有つ所以の眞原因を、國民の平和的膨脹に歸し、以て世の無識の徒が之を武器の成功に歸するの迷想を破れり。若し夫れ濠洲の大殖民地は、徹頭徹尾、農商工業的殖民たること、何人も之を知るが故に、更に絮說の要を見ざるなり。

第一三　露疆擴張の眞原因

近代史が現示せる國民膨脹の著明なる者は、アングロサキソン民族の坤球表面に殖民せしと共一にして、ルソ・スラヴオニック民族の南進繁衍すると共二なり。此二者の膨脹は、今後と雖停止せざるべし。チャーレスヂルクが、此二族を支那民族と並稱して、世界の三大民族たるべしといへる者是なり。而してアングロサキソン民族が、英國々旗の下に殖民するは、航海により商工業の力を以て進行し、ルソスラヴオニック民族が露國々旗の下に陸土を拓くは、農業の力を以て進行す。二者其方針を異にすと雖、共に國民平和的運動共主となりて、政府の外交と兵力が之に從ひたるが故に、著々成功して膨脹するなり。我國人が此問題を單に武力の征克と解釋するは、皮相淺薄の見解にして、之を人類歷史の眞相に通せざる過失に歸せざる可からず。

英國殖民の膨脹を以て、實業的發達の成功とする理由は、吾人既に之を述べたり。英國の事は、世人吾人の說を一讀して之に同意すると難からざるべし。然れ共固陋寡聞にして、而かも支那英吉利の文學に醉ひ、露國を地球上唯一の好戰國と信ずる我日本國人の多數は、吾人が露民の膨脹を國民實業的發達なりといふを聞きて、其意外の斷定に一驚するなるべし。吾人請ふ確實なる憑證を彼等に擧示せん。

「迅速なる露國の膨脹は、近世史上人目を驚すべき現象の一に居れり。千年前、見る影も無き民族が、ニーベル及び西ドヴキナ兩河の源流に傍ふて、部落を立て居たるに、忽然として成長し、バルチック海より北太平洋に到り、北極洋より土耳其、波斯、アフガニスタン、支那に達するの一大國民を形成せり。此膨脹の秘密は何處にあるや。是れ純乎たる野蠻的土地侵略の結果なる乎。若くは或る合理意念の擧動に出る乎。……露國の發達を、經濟の點より觀察せば、此中に注目すべき膨脹の一原因を發見するに難からず。農業民族が幼稚なる農業の方法を用ゐる時代

には、其地疆を拓くべき强大の勢力を有す。人口の增殖は穀物の增加を要迫す。而かも幼稚なる農業は、容易に地力を吸盡して、農產減少すべし。經濟の狀態此の如き時代に於ては、マルサスの說に所謂人口の繁殖と同比例に食物の增殖なしと言ふよりも、更に太甚き者ありて、人口の繁殖に對して食物減却するに至るべし。是に於てか人口減却の方針を取りて、幼兒を殺すを尤めざる古代の希臘の如き者あり。少婦童男を他に鬻ぐシルカシアに於ける如き者あり。又は移住の方針を取りて、他國に出づると、第九世紀に於けるスカンヂナヴキア民族の如く、又英人が現時平和方針によりて、實行しつゝあるが如き者あり。此他の方法は耕すに足るの地疆を拓く乎、又は地味を養ふて生產力を增す乎の策に出ざる可からず。露民は農作民族たるの故を以て此困難に遭遇せしが、彼等は他の國民の如き至難の地位に立たず。そは露國の地形、高山荒洋に限劃せられず、南東に橫はる人口稀疎の曠原は、耕者を迎へて地產を供せんと待ちつゝあり。子を殺し女を賣り以て人口を減ずるの必要を見ず。又海を超へ人を移すの計畫を要せず。疆域を平原の接地に拓きて、容易に人口增加の需要に應ずるを得べし。此原因によりて自然の膨脹を爲し、是を助くる種々の出來事ありて成長せり。……但し其東歐及び亞細亞の北部カムチャツカを含むの地疆は、多くの河湖あり、森林蓊鬱として、人口殆ど無く、之に反して南は黑海に至り、東は中央亞細亞に至るの疆域は、曠原平野にして遊牧の人民之に居り、森林を伐りて耕地と爲すの勞を要せず。是れ露人が一方には森林河湖の天然力を平和に平げて進行し、一方には游牧の蠻民をコサックによりて壓服する所以にして、其進行の方法を異にするは、地形の異なるに原因するなり」

是れ英國中第一の露國通として推さるゝマツケンジー・ワレースの說明にして、彼は露國研究の爲めに多年彼國に滯留し、露國地學協會員として其形勢に精通する人なり。此說明を見るに、露國が地疆を拓き、人口を增すは、國民的膨脹にして、征

克的膨脹に非ず。其コサック兵の中央亞細亞に出沒するは、牧民と農民の競爭、詳言すれば、土民と露民の競爭に於て、兵力を露民に貸すの運動なり。我國人が我神后豐公征軍の鷄林を侵略せし古事を把りて、露人拓地の問題を說明せんと欲するは、眞に幼稚の見解と言はざる可からず。

第一四　無方針の拓地を否認す

吾人は英露二國が地彊を拓き殖民を成したるは、政治的武力の擴張に非ずして、國民的膨脹の結果たることを說明したり。然れ共何れの國民か他國と勢力を競ふに於て武器の作用を全く離るゝことを得んや。平和を國是と爲し、武力の拓地を避くる合衆國すら、テキザスの件に就て、墨斯哥を伐ち、其結果新墨斯哥を割取するに至れり。露國が數百年間、武力によりて領略したる所、亦實に多し。特に海港をバルチック海と黑海に得んが爲めに、武力を用ゐたるは、普く世人の知る所なり。然れ共是等の征克は、天然の地形が露國に便宜を與ふる者にして、他國の支吾を容れざる域內に屬す。其初めに當りては、露國自衞の爲めに、近隣の諸國と競爭し、今日殆ど其限域に達したるが故に、此上無意義の戰爭により、利益なき地彊を拓くこと無きは、歐洲に於ける露の現狀なり。獨り東洋に於ては、支那土崩瓦解の兆あるが爲

めに、露の疆界其北方に開擴せらるべし。而して此方面に於て、露國良港を得んと
を望で、旅順大連の占領を實行したるが爲めに、我國人は支那英吉利の文學に涵養
せられし恐露病を發し、或る論者は露の南進を防ぐを以て、日本の義務の如くに過
信する者あり。露の南進は我が國の平和を脅すと誤想する者あり。而かも予輩の見
は之に異なり。我が國是若し東亞の大陸、就中其北部の地疆を領するにあらば、露
の南進は明に我利益と衝突すべしと雖、我にして此空想を懷かざれば、毫も其衝突
を見ざるなり。抑我日本が大陸に政治的領土を有するの至難なること、之を有する
も、其利益あらざることは、常識を有する者の異議なき所なるべし。予輩は再び此に
繰返して明言せん、國民的膨脹によらざれば、領土を保有すること能はずして、我
今日は此時期にあらず。强て武力により政治によりて、之を遂げんとするも、內は
國力を費耗して、外は外國の猜忌を長せん。是れ唯利益なきのみに非ず、其損害豈
小ならんや。

抑地疆を拓くは、土地其物を目的とするに非ず、之によりて實益を受けんが爲め
なり。然るに之を保有して、日本化するの力あるに非れば、何の利益なくして、紛
擾を招き爭端を啓くの損害あり。況や海を隔てゝ領地を收むるは、至難の業たるを
や。露人原來地を拓くに鋭意にして、經濟の智識に乏し。然れ共見込なきの地を强
て保有せざるなり。露は曾てベーリング海峽を隔てゝアラスカを領せしが、千八百
六十七年、之を合衆國に賣却したり。是れ其海峽を超ゆるの地は、保有して、之を
利用するを難しとせしが爲めなり。佛國は曾てルイジヤナを北米に有したりしが、
千八百〇三年、之を合衆國に賣却したり。是れナポレオンが志を歐洲に逞くせんと
して、力を海外に分つを欲せざりしによる。予輩は我國人が何の目的も無く、虛榮
を博し、空名を成さんが爲めに、妄りに無方針の領土擴張を夢みるを笑はざること
能はず。本國充實せずして、屬地を海外に有するも、結局何の用を爲さゞるなり。
葡萄牙の亞弗利加亞細亞に於ける屬地は、何の用を爲す乎。利用し得ざるの屬地は、

結局之を保有する能はず。西班牙は終に西印度非律賓を失へるにあらずや。輕薄なる拓地論者、請ふ沈思一番せよ。條約によりて得たる支那の我居留地は如何に經營せられたる乎。我商工は能く之を利用し得たる乎。臺灣我に屬してより五年、如何に之を開殖し誘掖し利用するの能力を示したる乎。予輩は許多の論議を費さずして、大陸割取の非擧を證明するに難からざるを信ずるものなり。

第一五　貿易の衝突は却て英獨に在り

我日本舊時の迷夢を全脫し、武力的拓地の方針を棄てゝ、以て平和の繁榮を商工業の發達に求むるとせば、東洋の經略に於て、日露の利益斷じて衝突するの點を見ざるなり。吾人は一歩を進めて、其衝突に類似する者は、却て日英米獨の間に在ることを語らざる可からず。我日本古來農業を以て國を立て、舊想の人々は瑞穗の國と誇稱すと雖、毎年人口四五十萬の割合を以て增殖する日本民族は、到底農業を以て永く立つべきに非ず。凶年飢歲に外國米を輸入するの一事を以て、其大勢を察すべし。幸に海運の至便あり、又石炭に乏からず、人口多くして工藝に拙ならざるの國民なれば、工業を振ひ商業を張りて、以て平和繁榮の一雄國たるべき好望あり。今日不十分ながら歐洲の科學工藝を援て、工業の新產を出し、之を支那印度朝鮮に供給するの發程に進みしが、是等の物產は今後何等の國と競爭するの勢なる乎。紡

續絲洋燧麥酒漆器、其他雜貨の類は、英獨の國產と支那印度の地彊に競爭するも、露國は曾て我に對抗するの國產を出さゞるに非ずや。勞力の競爭は如何。濠洲米洲、カナダに於て、我廉價なる勞力の供給を拒絶せんと企つるは、世人の普く知る所なるも、露國は曾て此傾向無し。航海の事業は曾て米國と競爭したるとあり。英國と對戰したることあり。而かも露國は海上に此勢力を逞くする能はざるに非ずや。今日幼稚の我商工業と航業にして、尙ほ此の如し。後來歐西の諸國、支那の方面より我海上に勢力を益々及ぼすに於て、彼我利益の競爭熱は我國人の懷ける恐露熱よりも劇甚なるべくして、其直接の關係ある者は英獨等の諸國に在らんとするなり。

第一六　露國と貿易工業の衝突を見ず

露國は無人の曠原を經略して、亞細亞の北部を拓きしも、其人口、其富資、其工業、皆曠土の利を盡すに足らず、孜々として其經營に盡瘁しつゝあり。其良港を得んを望み、其鐵路を開かんと欲する、皆此熱心より發し、而して此進行に對する歐西の猜忌、就中英國の反對に平ならず。其武力を養ふは其進行の妨害を除かんとするに在りて、其極度戰爭をも避けざらんとす。是れ露國今日の位置なるを信ず。而して日本、武力の侵略を事とせざれば、露國の此方針と曾て衝突すること無く、却て彼我の隆昌を互に助くるに足るべし。是れ予輩の空想に非ず。現に我航路の浦鹽斯德に通ずるは彼れの歡迎して便とする所にあらずや。我國人の露領に移住して、平和の事業を營むは、彼れの反對なくして、其未開の曠土を利用せしむるに非ずや。此移民は政治の彊界線外に事業社會を組織し、益々增殖せんとするに非ずや。我工

業の産物は、露領に供用せられて、年々増加するの勢あるに非ずや。我漁夫は露領に出稼し、我雜貨器具は露人と我出稼人に使用せられ、土人と我國人の貿易は自由にして、鹽の如き鹹魚の如き、彼我有無を交換しつゝあり。西比利亞の曠原人口を增し、鐵道開くるに至らば、我工商の市場を此一方に得んこと疑ふ可きに非ず。而して儼として我利源の地たらんことは、吾人の信ずる所なり。吾人特更に爭端を露人に開き、以て彼我天然の福利を損せんとするは、抑何の愚擧ぞや。

第一七　露人の誤解

歐人由來歐洲以外の邦國を夷視するの僻見を有す。然れ共是れ未開の人類が通有の思想にして、文明の進歩に隨ひ、漸次減却する者なり。世界を通觀するに、歐人は智見廣く交通普きが故に、東洋人に比するに、此人性の通僻を有すること少しと雖、尙ほ未だ此痼癖を全脫せざるなり。其狀支那が中國自ら居りて四疆を夷視し、日本が神國自ら居りて萬國の上流に位すと信ぜしに類す。而して此迷想は、現はれて倨傲の狀となり、欝して畏怖の念と爲る。歐洲諸國ラテン、チユートン、スラブ諸族の間に、或は合從し、或は連衡して勢力を競爭し、佛國は文明の中心、義俠自由の國民なりと誇りて、英獨の利己的心腸を罵り、英國は秩序自由の調和を有する堅忍豪壯の國民なりと自認して、文明を地球に廣布するの天職ありと自任し、佛民を輕躁浮薄の人種と嘲り、獨乙は愛國武勇の民と自認して、歐洲の平和を保つは其

天分なりと自任し、以て他國を睥睨するの狀あり。露國はスラブ民族が敬虔忠愛の美德を有すと自認し、希臘民族の保護者なりと自信し、西歐の諸國には一も此義俠の心なしと卑めり。實地利益の競爭と自己誇揚の感情の爲めに、互に此牴牾ありと雖、其所謂基督敎國といへる圈內よりして、其圈外に對するの感情は、彼等同盟一致し て進行し來るとを忘る可からず。是亦同類自尊の觀念に外ならざるなり。露國が久く西歐諸國に夷視せられたるは、文華の中心たる西歐より、基督敎以外の國民の如くに擯斥せられたる者にして、近年英露協同の形勢に變ぜるは、露が此範圍の文國と認識せられたる者、亦其一たらずんばあらず。

抑基督の敎旨は愛に在り、平和に在り。基督敎國の名によりて、戰を事とするは、全く本來の敎旨に背く者にして、眞成の敎徒は之に反對すと雖、今日所謂基督敎國てふ名稱は、希臘羅馬文明を受けたる邦國と民族の意義にして、眞に此敎旨を實行する邦國の謂に非ず。而して實地に於て、歐洲諸國は、東洋諸國が歐洲諸國を夷視したると同一の倨傲心を有して、基督敎國以外の民族を夷視し、其勢力を得るを以て危險に感ずる者少しとせず。我日本が二十七八年の役に於て、支那の大帝國を擊破し、長驅して燕京を衝かんと喧傳せらるゝに當り、意外に狼狽の感に打たれたるは露國のみに非ず、之を聯想して諸國が猜忌の念を發したるは、世人の知る所なり。獨帝は譬喩畫を露帝に贈て、基督敎國同盟の必要を說き、平和の米人すら、日本の產物が米國工場を蹂躪せんと氣遣へり。其影響は、從來日本の視察者に開放したる歐米の工場を、秘密にするの傾向を生じたるに非ずや。就中此誤解の尤甚かりしは露國なり。露は日本が東海の島國より起りて、西向して歐洲を侵略すると無き乎を疑ひ、彼が南進して得んとする良港は、日本に奪はれ、東洋の海陸は、日本に占領せられ、更に長驅西進して、歐洲の諸國を震撼すること、成吉汗帖木兒侵略の如くならんと畏怖したるが如し。日本の眞相を審にする者は、原より此誤解の愚痴に類するを笑ふべしと雖、歐洲人が東洋の狀を誤解するは、往々吾人の意想外

に在り。流石に英佛は久く東洋の交渉を經たるが故に、此誤解を免れたりと雖、獨逸は既に一部分の迷想に落ち、露國は全く此鬼胎を懷きたるなり。其狀恰も我國人が露國を誤解して、地球上唯一の好戰國と思へるに類す。而して露國が斯く誤解するは決して偶然に非ずして、彼れに日本の形勢眞相を知るの機關無くして、却て誤解せしむるの報道あり、且露人が東洋民族を畏るゝこと、西歐諸國が餘りに之を意とせざると、其歷史傳說を異にする者あるによる。此消息は、露國の形勢に精通する者に非れば、決して解する能はざる所なり。

第一八　韃靼と露國

他國を誤解し、他國に誤解せらるゝ者、古來其例に乏しからずと雖、露國が西歐諸國に誤解せられ、又露國が東洋民族を誤解するは、其尤甚き者なり。英人が露國を誤解して、恐露病に罹るや久し。英人の眼中に、露人は韃靼の蠻族文明の破壞者の如くに映じ、露人の眼中に、日本民族は韃靼の民族文明の破壞者の如くに映ず。其誤解此の如し。故に彼等の胸中猜忌の火熱を燃して、以て其心智を暗くするなり。吾人冷眼を以て彼等の狀を見るに、殆ど一笑に値らずと雖、此理由なき猜忌は、曾て英露の衝突を激成して、兩國勇士の血を流し、近年に至る迄悔改の眼を開かざりき。吾人豈日露の兩國の爲めに、英露の覆轍史を示し、以て其迷霧を散ずるに務めざるを得んや。

露が土耳其の領地を收めて、黑海の濱に出るや、神經過敏の歐人は、帖木兒成吉汗の歐洲を蹂躪せし往事を想起し、就中英人尤畏怖の感を懷きたるが、當時黑海

の邊を探檢する旅行者は大抵軍人にして、軍人由來武器を使用するの能力あるも、古今を達觀し大勢を洞視するの智識なし。其報ずる所は、露が土耳其の國疆を呑噬する外觀のみ。其人種宗教政治農業工藝等の關係、人類優勝劣敗の作用等に至りては、原より無識なる武辨の洞察し得る所に非ず。而かも是等軍人の報告は、露の武力的侵略を拓地唯一の原因として、西歐人に傳へたるが故に、西歐人は益〻其眞相を見るに迷ひ、露人を以て文明の敵と爲し、却て土耳其を援けて無益有害の戰を開くに至りしなり。吾人當時西歐と露の衝突を以て、之を無智淺見なる武辨の誤れる報告に原因すと斷言せざる可からず。今其一證として左の言を示すべし。

「予の著書に一讀の榮を賜へる諸君は、歐洲が遠からずして狂信に驅られ、侵畧を事とし、自由に敵し、文明を殘害する戰爭の渦中に投ぜらるゝことを覺らるべし。彼等露人は、韃靼の酋長帖木兒成吉汗の引率せる蠻族の如し。韃靼蠻族の侵入以來數百年を經過し、人類の平和繁榮を助くる文明工藝は、古今無比の速度を以て進歩したり。然るに彼の莫斯古のスラヴオ韃靼種族は、往時西歐大陸の膏地繁榮を馬蹄に蹂躙鹵掠せし蠻民と大差なき者なり。……好戰の熱度は露國に充滿し、或る者は侵掠を樂み、或る者は狂熱に醉へり。彼得が大帝國を創建したる所以、其祖宗以來執る所の政略、皆此力による。此く內に充滿せる者を外に洩し、皇帝が內の安全を保たざる可かざる勢は切迫せり。皇帝假令戰爭を好まざるも、如何ぞ之を止むるを得んや。此の如き人民此の如き政府に對して、如何に之を遏せん乎。曰く他なし、世界の平和を脅すべき動力を彼等より奪ひ、撻伐懲治して、彼等を亞細亞の荒原に驅逐するあらんのみ。」

是れ英國陸軍大尉スペンセルが、其著「土耳其露西亞黑海及びシルカシア」と題する書の總論に筆する所なり。彼れは多年の間東歐及び西亞の間を遊歷視察し、シルカシア旅行記、西高加索、歐土旅行記等の著ありて、當時此地方の形勢に精通するの名ありし人なり。而して前段引抄する文書は、千八百五十四年龍動の出版に係り、恰もク

リミヤ戰爭の年に當るを以て、當時の英人が如何なる感情を以て露人を迎へ、如何なる熱信を以て露人と戰へるかを追想するに足るべし。英國が露國の眞狀を知らずして、小數武人の短見に誤られ、國運を無識の犧牲に供したるは、今より之を見るに眞に憫むべきなり。一般の英民は、是を以て自由文明の敵たる韃靼蠻族と戰ふと思ひしも、其實は、却て進歩に望なく、横虐苛酷の土耳其を助けたる者にして、其結果は全く其本心と相反したり。而してバーマーストーンの如き豪傑も、徒らに人望を收め功名を博するの念に驅られ、無益の血を流して、永く後害を此問題に遺し、其後ヂスレリーの如き輕薄の政治家、此誤れる方針を繼承し、以て人類の進歩を阻み、希臘民族の自由を毀てり。而かもクリミヤ戰後四十餘年の歴史は、彼等の功過を打算して、其失計を事實に證明し、英露協商に終らんとするは、我國民の殷鑒となすに足らずとせんや。唯正義の士、天來の智を有す。ボルクが百年以前に豫言せし所、コブデン、ブライトが五十年前に痛論せし所、グラッドストンが二十年前に詳說せし所、眞に欽仰すべきの眞智達見と言ふべし。

英人が無學の爲めに、國事を無識の武人に過たれ、而して露人其寃を訴ふると此に年あり。然るに今や露人が同一の誤解を爲して、東洋の平和を害せんとするは何ぞや。予輩其由來を記して以て露人の謬見を打破する鐵筆を執らざる可からず。

第一九　露人恐日病の由來

太古は藐焉たり、史の徵すべき者なし。然れ共近世博言家の考證により、印度及歐羅巴の民族が、共に其源を亞細亞の邊に發し、南進せる者は印度民族と成り、西向せる者は歐洲諸國の先祖と爲りたるとを知るを得たり。歷史以前人類の大移動は語脈の統系によりて、僅に之を尋ぬるを得るも、歷史の時代となりてより、此東西に分派せる民族の交涉接觸せし者は、波斯の希臘諸國に對する交戰あり。然れ共是れ僅に東歐西亞の狹少なる部分に過ぎず。其兩洲の一大變動は、歷山帝が波斯を覆へし、長驅して印度に入りたるに在り、(紀元前三百二十五六年頃)。是れ歐人が亞細亞に侵入せし一大事件にして、其他は近代に於て、蒙佛蘭英が海上より印度に入りし者を除き、曾て西方より東侵せし者あらず。之に反して、東人の西侵せるは、唯一二回に止まらず。紀元四百年頃には、蠻酋アッチーラが匈奴の衆を率ひて、東羅馬

帝國を侵し、長驅して佛蘭西伊太利を亂せしことあり。紀元七百年頃には、サラセン民族の、西班牙を取り佛蘭西に鏖戰せしことあり。其後成吉汗（元太祖）の漠北に崛起するや、波斯を取りて餘威歐洲に震ひ、(紀元千二百年間）帖木兒の繼で兵を進むるや、波斯を取り、ジョールジアを從へ、(黑海と裏海の間に在り）現時露國の版圖は皆彼の馬蹄に蹂躪せられたり。古來東西民族の移動を考ふるに、歷山帝の遠征と、サラセン民族の西進とは、其結果に於て東西文明の聯絡を現出し、一はアレキサンドリアに印度希臘の文華を萃め、一はアラビアの科學工藝を歐洲に敷きしと雖、其他東人の西侵は、一も進步に助けなくして、兵火の慘狀紙筆の記するにたへざる者あり。特に亞細亞の北部に起れる蒙古韃靼の西侵は、非常の感情を西人に遺し、苟も東洋民族と言ふ時は、何となく西歐人に嫌惡の念を發せしめ、亞細亞の文字に對して殘虐蠻風の意義を聯想せしむるに至れり。抑英人が熱心に露人を敵視したるは、其東方に起りて韃靼民族と同視せられたるに因り。露人が深く土耳其を疾

みて、希臘民族の救濟に熱心するは、又自國の韃靼民族に蹂躙せられし往事を追想して、東來の土耳其民族を疾むに起因せり。吾人は露人が韃靼民族に對する感情の如何を記する爲めに、此に露國OK夫人の筆を借らんとす。

「露國が韃靼民族虐政の下に落ちたるは、六百年前に在り。此以前露國は、歐洲の隣國の如く自由なりき。繁榮して進歩しつゝありき、準奴隷の制を知らず。テニソン詩伯が疾視する、背を撻つの刑は、韃靼に征服せられて、二百五十年後に立てられたり。露領に小民主國の併立せし、其狀、恰も伊太利に於けるが如く、大公の權力も、他の君主に超るにあらず。然るに十三世紀の半に及び、不幸にも露國が亞細亞に接壤するの故を以て、韃靼の侵略を蒙りたり。千二百二十四年、韃靼初めて露の南東を取れり。其羈絆を全脱せしは十六世紀に在りて、二百年間彼れに苦められたり。アレキサンドルネブスキー大公の號を韃靼より許與せられしは、千二百五十二年にして、彼等に貢献するを廢止せしは、千四百七十六年に在り。イヴアン三世が蒙古の兵を擊破したる後も、韃靼兵は屢露國を侵掠したり。英國は彼が如きシエークスピーアを生じて、エリサベス朝を耀かせる千五百七十一年に、モスコー府は亞細亞の蠻族に襲はれて、全市焦土と化したるを知らずや。韃靼の侵掠といへる言辭は簡單にして、西歐人は其事實の如何に殘刻慘苛なるを想見する能はざるべし。西歐人は遠く此侵掠を感想するも、尙震悚するならん。仁慈なる佛王サン・ルイ天に祈りて曰く、韃靼人を其故土の韃靼に驅り入れ玉へ、願くは彼等をして地上の人類を鏖盡せしむる勿れと。彼等の酋長は人を殺して頭顱の山を築きたり。露國が彼蠻族に困められたること二百餘年、其生命財産は、全く彼等の有となりたりき。韃靼の無道は、英人には想像なり、露人には實驗也。韃靼無道の言辭は、吾等露人幼年以來の耳に熟せり。モスコーは二回彼等に占領せられ、露國到處の市府は彼等の鹵掠を免るゝ者少し。少くも二百年間の歴史は、露人の生命自由を、彼等の羈絆より脱せんが爲めに戰へる歴史なり。

露國の勇士とは、此戰爭に身を犧牲にせし者をいへり。此の如き歴史を有する露國は、東洋の蠻族が歐洲を侵すの途を遮ぎりたり。之が爲めに歐洲は害を免れたるも、露國は害を蒙りたり。國人の勢力之が爲めに瘁盡し、其進歩遲々たる今日の如きは、韃靼の侵略に原因し、曾て繁昌せる市都は衰替したり。準奴の制は彼等の遺せる所なり。我等が東洋民族の土耳其の暴虐に對して、希臘民族に同情を有するは、同病相憐の感に出づ。土耳其の運命は、帖木兒の曾て爲せる惡業の餘報に非ずや。」

是れ千八百七十七年、露國の一婦人が、OKの名を以て英人に訴へたる書翰の一にして、當時露土の事件、英國社會を驚擾せしに當り、是等の文書大に英人に感動を與へしが、英國史學の大家フラウド蒐集して一書となし、自ら序を作りて公刊し、之を嚮ぎて、其資金を從軍露人の病傷救濟費に寄與したる者なり。是等の文書は、露土戰爭が其根柢に如何の原因を有する乎、我國人が此問題を研究するの一端と爲すに足るべし。

然れ共吾人が之を此に抄出したるは別に故あり。歐人が東洋民族に對して意外の惡感情を有し、歐洲の諸國が相互の間競爭の劇甚なるに拘らず、其東洋に對するに於て忽然聯合の運動を爲すは、彼等が曾て東人の侵入に懲り、之によりて一種先天の性質を成すによることを發見すべし。而して露國が二十七八年の役に狼狽して、意外の恐日病に罹りたるは、日本が支邦を破り長驅北進して止まる所を知らざるべしとの、鬼胎を懷きたるによるなり。嗚呼、是れ焉んぞ彼等が東人侵掠の苛き歴史を記憶するの結果たらざるを知らんや。

第二〇　恐日病の發作、臥薪嘗膽の誇言

曾て蒙古羈軛の下に呻吟せし露人が、東洋民族を忌み且恐るゝの性質を涵養したること久し。而して日本が維新以來百般の改正を實行し、文武の庶政を革新したることは、歐人をして往々事實に過ぐるの評を立てしめ、屢〻外人視察の媒と爲り、露國皇族の來遊も亦一再のみならず。而して日本が朝鮮に事を生ずるの歷史は、彼れ露人の猜忌を挑撥し、在韓の露人中、日本大陸に野心ありと報告せし者ありと推測せざる可からず。且我國の新聞雜誌が、恐露熱を洩らしたること亦少しとせず。其之を露國に遞傳するに至りては、虛の變じて眞と化せしこと、決して疑ふ可からざるなり。而して露帝の來遊（當時の皇太子）に際し、不幸にも狂人の現出して、彼我の國民を驚駭せし事變あり。幸ひに我天皇皇后兩陛下が厚く誠意を表し玉へると、國民が一齊に同情を發したる結果、變事は一狂人の狂擧にして、日本國民は斯かる狂擧を疾み、蠻行を卑む國民たるを示し、以て國家の汚名を雪ぐを得たり。而かも假りに吾人をして露國人民の位置に立しめば、彼等は如何の記憶を腦中に印し、如何の斷定を我國民に下さんかを考慮せざる可からず。此の如き感情は一旦消滅するも、他の出來事に聯想して其記憶を新たにするとあり。彼の二十七八年の役に際し、露國は如何の感情を以て日本を迎へたる乎を見よ。

吾人をして遠慮なく日本民族を評せしめば、調子に乘りて大言自誇するの短所あり。仲尼曰く、君子は其言の其行に過ぐるを耻づ。又曰く、君子は言に訥にして行に敏ならんを欲すと。自ら君子國と稱して、仲尼の所謂君子の言行と背馳するは、我國人の短所なり。朝鮮遼東に支那の人足兵を擊破したるを誇り、直隷取るべし北京衝くべしと大言叫號し、支那に對して結局何の關係を定むべき乎、大陸を略取して之を安撫し、保有し、利用し得るや否を一考せざりき。而して露人は遙に此狂熱を睹、此狂呼を聞き、遠くは亞細亞民族の侵略史を想像し、近くは狂人津田三藏の記憶を回

起し、東方の蠻族、大陸を席卷せんとを恐れたる者あり。朝鮮の背後より支那の北部を經略する進路を妨害するとして、之を忌む者あり。是等の情思總合して懊惱煩悶し、發して三國干渉の企となれり。而して支那を擊破して意氣昇揚せる日本國人は、此干渉に對して如何の聲を擧げしぞ。怯憶の常路者は、武力の不足に推諉して、外交の失計に非ずと辯疏したり。無識の武人は、武力を養ひて、他日の計を爲すべしと大言したり。國民は、政治家を責むるの反動として、思慮なき武人の大言を喝采したり。輕薄の政黨員は、此風潮を利用して、軍人の氣象を鼓舞したり。此に於てか臥薪嘗膽の四字は、普く論者の口に上り、第九議會は此狂熱の中に開かれて、國是必要以外に軍備を擴張するに至れり。吾人は根本より此政策を非認し、一日も反對の筆を絶ちたること無し。然れ共風潮の人を移すは古より然り。平和を主義とし實業を國本とせし政黨新聞記者、論客、自ら奔りて此渦中に投じ、何時の間にか軍備擴張論者となりて、盛に好戰の風尚を國民に鼓吹したり。憶ふに彼等は其本心より來る者少くして、我國民の短所に乘じ、時好に投じたる論者尤多く、或は一時の政權を握らんが爲めに迎合する者亦之あり。然れ共三年の歳月を經過して、潮流は既に低下せり。三十二年の今日に至り、尚ほ武力を以て大陸征克を主張する者、恐くは是れ無かるべし。而かも議論の隋力、依然軍備擴張の辨疎を爲すを以て、政客の誇言虛話に過たれ、迷路に徘徊する無智の人氏、亦絶えて無しと言ふを得ざるなり。嗚呼憫むべきは、欺かれて迷路に立つ無智の人民なり。氣の毒なるは、此疆遇の下に、惡稅を增加せられたる國民なり。而して此外觀を遠見して、日本絶大の野心を疑ひ、之が爲めに西比利亞の戍兵を增し、無用の恐日病に罹れる露人も、亦憫むべき者と言はざる可からず。

第二一　露國西比利亞領の經略

支那帝國其控御の實權を失ひしより、長城以外は久く化外人民の觀を呈し、蒙古滿洲の曠土、自然露の勢力に歸せんとす。英國猜忌の眼を以て之を見るも、此一帶の曠原は、海上女皇の手を下し得る地方に非ず。故に其初めに當りては、支那を輔けて露を抑へんと試みたること、恰も西歐の方面に於て、土耳其を援けたるが如し。然れ共其本領すら保全の力を失へる支那政府は、到低長城以外を保有する能はずして、露の南進は遂に防ぐべきに非ず。英國は徒らに言論の攻擊を爲すに止まりて、嘗て實地の抵抗を爲さゞるなり。而して遠識の士は、夙く英露協商の必要を說きて、無益の爭鬪を東亞に生ぜざらんことを豫告したり。唯英人の多數は、從來の感情を脫せずして、現在多數の意見を代表するタイムス新聞の如きは、世に先だつの說を立てざるを以て、其本色とするが故に、依然露の南進を痛擊するなり。我日本人民は、此說を其儘適用して、露の滿洲經略を恐怖するも、予輩は更に其說に同ずること能はず。我國人が日英協商を夢みて、理由なく露を敵視し、英によりて露を防がんと欲し、之が爲めに日露兩國の不幸を招かんとするは、眞に愚なりと言ふべし。近日英露協商の約成りしは、是豈吾人豫言の實にせらるべき明證に非ずや。

「西比利亞鐵道の完成は、露が兵を東洋に用ゐるの時期なり。其不凍港を東亞に得るは、支那海日本海が露帝園內の池沼たる時期なり」と。是れ恐露病者の喋々說く所なりと雖、吾人は其無計算と怯臆とを笑ざる能はず。利益の衝突は戰爭の原因なり。日露嘗て利益の衝突無し。何ぞ露の西比利亞經略を恐るの理由あらんや。如是恐怖は、畢竟我國人が露國の形勢、就中西比利亞の形勢を知らざる過に坐す。且日本、武力によりて大陸を征克するの空想を懷かば、兩國の利益此方面に衝突して、論者の患を實現すべしと雖も、常識を有する者、嘗て大陸征克を思はずんば、露の不凍港を得ると否と我に於て何かあらんや。吾人は却て五十餘萬の陸兵を養はんとする我

至愚の計畫が、露をして西比利亞の不安を感せしむる原因たるを思ふ者なり。何ぞや。深沈達識の日本國人は、何が爲めに苛稅を國民に徵して以て五十餘萬の兵を養はんとする乎。且之を何の地に用ゐんとする乎を解する能はざるが故に、其失計を攻擊するなり。露人も亦同一の理由により、日本は五十餘萬の兵を何の地に用ゐる乎を解せずして、其心術を疑ひ、隱然我に備へんとするの心あるべし。是れ日露互に他の野心を疑ひ、彼は我の爲めに兵備を嚴にし、我は彼の爲めに兵數を增し、其結果、平時には苛稅を徵して、農商工業を壓し、一旦交情破裂せば、兩國勇士の血を無用の地に濺ぐに至らんとす。愚の極、策の失、豈之より大なる者あらんや。

吾人は斷言す、露の不凍港を東洋に求むるは、自然の情なり、日本國民をして露國人民の位置に立しめ、其をして西比利亞の拓殖を計らしめば、亦露の爲す所を爲んとす。何ぞ獨り彼の所爲を怪まんや。露が不凍港を有するも、東洋危險を生ずるの患無し。英人嘗て之を唱へて、日本國人其顰に傚ふ。予輩は英人の怯を笑ひ、日本人の不詮索を笑はざること能はず。英人原來此の如き癇癖あり。佛人レセップ嘗てスエズ溝渠を開かんと企つ。英人以爲へらく、是れ歐洲諸國が英領印度を襲ふの通路を開くものにして、危險の虞ありと。之が爲めに、バーマーストーンの內閣は之に同意せざりき。然るに此開渠以後の實歷は、世界の文明を稗け、英國の利益を高め、印度の安全を保つに非ずや。佛國のアル・ゼリーを取るや、英人以爲へらく、地中海は佛の支配に歸せんと。然れ共之が爲めに佛國が英國の治安を脅かすこと絕えてある無し。米國南北戰爭の止むや、英人以爲へらく、百萬の兵は之を平和の民籍に歸する能はずして、必ずキャナダ領を襲はんと。之が爲めにキャナダの國疆を嚴守したり。而かも米兵は農商工に復歸して、英人を一驚せしめたり。英人由來保守の性質を有して、新たなる企畫を忌み、他國の進步變革に驚慌するの性質を有す。露國に對する猜忌、畢竟此性質の發露に外ならざるなり。吾人豈英人の顰に傚ふて東亞經略を忌むの要あらんや。

第二二　西比利亞鐵道

我國人が露人西比利亞の經略を恐れ、鐵道の布設を怖るゝは何事ぞや。露人が海を渡て日本を襲ふを患ふるに在る乎。抑日本が大陸を經略せんと欲し、而して露人が之を妨ぐるを憤ふるが爲め乎。此の如く正格の問を下せば、彼の恐露病夫は一も眞面目の答を與ふる能はざるなり。此に至りて予輩は斷言せん、露人の西比利亞を經略するは、日本後來の利益と爲るも、決して我危害と爲らざるとを。抑露人が無人の曠原を拓く策の第一として、鐵道を布設するは、至當の計畫にして、他國が之に向て異言を挿むの理由ある可からず。英人が妄に之を喋々するは、抑何の理由ぞや。英國は夙に其米領キヤナダに、長鐵道を布設して、太西洋の濱より太平洋の岸に達せり。若し他日東洋に事ありて、本國の兵を送るに此鐵路を使用せば、是れ用兵の鐵道に非ずや。世人此鐵道に一言の批評を容れずして、特に西比利亞の鐵道を云々

するは、吾人の怪む所なり。

吾人は西比利亞の鐵道を以て、露人が日本を擊つの準備と理會せずと雖も、假りに恐露病夫の神經を鎭めんが爲めに、露人に此意あり、鐵道を之が用に供せんと爲して立論せん。露國の根據は、言ふ迄も無く、歐洲露領に在りて、西比利亞鐵道は一千九百餘哩に渉る。此一條の鐵道によりて陸兵を東洋の濱に送るとせば、十萬の衆を我對岸に集ると、決して易事に非ず。之に副ふの輜重食糧、並に人夫を以てせば、露は鐵道の布設によりて、著く用兵の勢力を增すを得ざるなり。露國の猛將スコベレフ、嘗て露軍が印度を擊つの風說を冷評して曰く、「予は英國の陸海軍報が露軍、印度を襲はんと論ずるの文を揭ぐるを讀み、英の軍人は何故に此の如き空論を爲すかを怪めり。予は此の如き遠征の指令官たるを願はざるなり。予がアカールを伐つに五千の兵を用ゐしが、運輸の爲めに二萬の駱駝を要したり。印度を伐つには十五萬の兵を用ゐざる可からず。其六萬を印度に入れ、其九萬は運輸に用ゐざる可

からず。吾等は何處に糧食を資らん歟。アフガンは貧确の地、此兵の爲めには糧食を給せざるを如何せんや」と。露人が其根據を歐洲に有して、東海の邊より遠く兵を東洋の岸に送る、其困難は印度に對するよりも甚し。鐵道を以て、駱駝の用に代ゆるの一點は、大に其困難を減ずべしと雖も、糧食に乏きの困難は依然として存す。彼れは兵と共に遠く糧食を、千哩の外より運搬せざる可からず。クリミアの役、露は輜重の豐ならざるに苦みたり。土を伐つの戰にも、亦露は糧食の供給に困難せり。夫れ歐洲の本土に於て戰ふも尙ほ斯の如し。陸運が水運よりも困難なるは、實驗の證する所なれば、西比利亞一條の鐵道を以て、東洋に多くの兵を用ゐる能はざると、推して知るべきなり。此點に於ては、本國遠しと雖、英國却て東洋に兵を用ゐるの便あるを覺ふ。其印度香港に領土を有すること、各方に要港を有すること、キヤナダの鐵道が太西太平の二洋を貫聯すること、加之艨艟あり運送船あり、以て海陸の聯絡を自由にするあるをや。我國人が英の勢力恐るべきを語らずして、獨り露の襲擊に兢々たるは、吾人其何の故たるを解すること能はず。

一歩を進めて、露が廿萬の大兵を北太平洋の岸に集め、又輜重糧食之に副ふと假定せよ。對岸の露兵は、我に何事を爲すを得る乎。一隻の船千人の陸兵を搭すとせば、十萬に百隻を要し、廿萬に二百隻を要す。露國は此船舶を東洋に泛ぶる力有らざるなり。且此に至て日露兩國の勢力を角する者は陸軍に非ずして、海軍に在り。露國百萬の貔貅を擁すと雖、之を送るの船舶と之を護するの軍艦あるに非れば、何の用を爲さゞるなり。吾人が我國の兵備を論ずるに於て、常に海軍の整頓を先にすべしといふは、此理由あるによる。是れ吾人が獨り露に對して言ふに非ず。今や坤球縮り來りて、西歐東亞混じて一の交通社會と爲れり。日本此間に介立して、國力を伸べ、國勢を保たんとせば、自守の海軍を有するを要するは、如何なる平和論者も見認むる所なり。吾人此見地より立論して、常に海軍の要を說く。强ち一國を怯れて之を言ふに非ず、又好戰國民として之を說くに非ず。然れ共假りに恐露病夫の

說によりて、露の東洋經略に備へんとせば、又陸軍の力を彼れに角するを要せずして、海軍の力を養ふを思はざる可からざるなり。彼の西比利亞の鐵道、我に於て何の患ふべきことあらんや。

第二三　故なく敵を作るの愚策

日英聯合を夢想して、露の南進を防がんと欲し、以て英國がバルカン半島に對する四十年前の舊歷史を東洋に繰返さんとせし論者は、英露協商の近報に接して一驚せしなるべし。然れども是れ必然の勢にして、吾人は其此に至るべきを豫想し、毫もこれを怪まざるなり。蓋し實地利益の衝突は、戰爭の原因たるべきも、利益の衝突なくして、何の國か戰爭の愚舉を事とせんや。四十年前英佛が露を伐ちたるは、少くとも二國の當路者が露と利害衝突すと信じたるが爲めにして、爾後通信開け、交際進み、露國の形勢西部歐洲に知らるゝに及び、漸次彼此の敵情を減殺し、特に中央亞細亞の地形詳悉せられて、露人印度を襲ふの杞憂薄らぎ、英露の爭漸く絶えんとするは、敢て今日に初まるに非るなり。

蓋し故なく他國を敵視して、我を疾視せしむるは、智者の擧動に非ず。千八百五十

四年、英佛聯合して露を伐つに當り、地疆二國よりも露國に接近し、關係二國よりも露國に厚き普漏生(プロシヤ)墺地利(オーストリー)は、半途より局外に立ちて、此爭に入らざりき。蓋し普墺は獨乙聯邦の間に、勢力を爭ひて、其頭領の位置を占めんとする志を懷き、內は自國の潛勢を養ひ、外は露國を敵とせざるに注意したるが爲めに、英佛と進退を共にせざりしなり。其後普墺の哽國(デンマーク)を伐つにも、露國は中立したり。普墺相戰ふにも、露國は中立したり。普の佛を伐つや、ビスマークは特に辭を卑くして、露の中立を保證せしめ、以て後ろ安く佛を擊破したり。ビスマークの智者たる所以の者、實に此處に在り。然るにベルリン會議に於て、露は年來獨に示したる好意の報酬として、獨の露を助くるを豫期せしに、ビ翁中立せしを以つて、露國初めて獨國に快からず。當時ビ翁は佛に對するの必要よりして、墺伊を聯ぬるの心算を有し、露の不快を顧るの暇無かりしが如し。彼れ豈故なく敵國を作るの愚を爲さんや。其の後露獨の間、關稅の紛議あり、是亦貿易の實利に關する者にして、恐露病夫の妄想と全く相異なり。ビ翁去りて今帝は露と交際を厚くするの方針を取り、之を以て佛露の親交を薄からしめんとするが如し。現今墺の一國稍露に薄きも、佛は尤露に親み、英も亦近年恐露病を免るゝに至りて、東洋に於ける英佛獨露相爭ふべき實地利益の衝突あるを見ず。世界の形勢此の如し。日本が獨り、英國四十年前の舊史を繰返さんとするは何の愚策ぞや。試に問ん、我國の恐露論者は、我獨力を以て露の東亞經略を支吾するの自信ある乎。此自信なくして、故無く英人過去の口吻を學ぶ。ビ翁をして之を聞かしめば、咄孺子、何の愚を爲すと評せんとするなり。

第二四　英露協商の由來

保守第一の英國々民すら、先見の諸氏多年の教訓によつて、恐露病漸く癒へんとす。吾人は此先見者二三の言論を抄出して、我國人の妄想を排せん。抑英人が露を天然の敵國視せしは、其相知らざるに起因す。故に識者は、先づ露の何物たるを知れと訓誨したり。

「東洋問題は、英露の二國が之を解釋するの職分を有す。兩國の正當なる冀望を實行するは、其問題極めて宏大なり。然れ共結局協同する能はざる者なりと速了するは、幼兒の見解なり、吾人は實地の利害を棄てゝ空想に據る可からず。誤解の爲めに戰を爲す可からず。通じて論ずるに、吾人の職分は他に在らず、曰く吾人は露國の形勢を知悉せざる可からず、之によりて無要の衝突を避けざる可からざるなり。」

是れワルレースが其大作「露國」を著せる所以の趣旨なり。

「英人動もすれば、露帝我印度を取らんとすといふ。嗚呼是れ妄想のみ。人若し此疑問を擧げて予に質さば、予は我英國の過去現在の政略より推測して、露が印度を襲はんよりは、英が露を襲ふの虞ありと言はん。亞細亞に於ける英國近世の政略は、露に比するに更に進取的にして、好戰的也。」

是れジョンブライトが、千八百五十三年、エヂンバラに於て爲せる演說の一節なり。

「露國人民は、好戰民族に非ず。英人が露を好戰民族と想へるは、誤解の甚き者なり。徵兵の露人に嫌はるゝは、其好戰民族に非るを見るべし。徵兵檢査官が、村落に徵兵を檢するや、僧侶は喪式に等き儀を行ふなり。予が聖彼得堡に在りし時、一英商は予の爲めに、露人が兵役を好まざる狀を語りて曰く、予（商人）此府内の某街に入りて、徵兵不合格の市民が踊躍して、其の不合格を語るを實見したり。露國々民は決して慓悍に非ずして、寧ろ穩柔の民族なり」（千八百五十年、

龍動に於るコブデンの演說）

然れ共二氏は平和を主義として、一切の機略を擯くる論者なり。其露國を評する の說、世の所謂政治家を滿足するに足らずとせば、吾人は更に左の證言を擧げんとす。

「亞細亞に於ける露國を恐るゝ者は、老婆の心配に異ならず……英國をして露國の位置に在らしめば、土耳其の蠶食今日を待たざるべし。」

其語直截忌まざること、コブデン、ブライトに過ぐ。是れグラットストーンの千八百七十九年十一月二十七日、ウエストカーダーに於ける演說の一節なり。是より先き千八百七十六年、翁がブレツキヒースに於ける演說は、英露協商の政略を明言したる者なりとす。

「予は露國が決して私利慾望を懷かずとの夢想を胸中に畫く者に非ず。其私利慾望は他の諸國に同く之を有するを信ず。然れ共露國も亦他の諸國の如く、仁慈の感念を有し、現にバルカン半島の方針は、此感念の發動なるを信ず。英露若し心肝を披瀝して協力せば、此疑問を解釋して好結果を得ん。協同の勢力は洪大なり。陸に於ける露、海に於ける英、兩國の勢蓋し測る可からざるなり。」

然れ共翁は嘗て露國に偏するの評を、反對黨より博したる人なり。故に吾人は更に他の說を擧げざる可からず。

「英露の二國は、歐洲の文明を亞細亞に誘引するの事業を負擔することとなれり。……二國協同して同一の目的に從はゞ、東洋民族の進步は、平和且迅速ならん。若し猜忌して抗爭せば、ボスフオラスより萬里の長城に達する曠野は、各種の民族部落隱謀百出の地とならん。新たなる秩序を立つる迄に、數百年を費し、戰爭革命相尋ぎて、吾人亦其餘禍を受けんとす。概して之を論ずるに、露人にして到底天地の間に並び立つ可からざるの惡民族に非る以上は、英露協同するは英人の利益なり。此結論に到着するには、先づ露人は如何なる民族なるやを知るを要す。

是れ吾人が意を露國に注がざる可からざる所以なり。」

是れ史學の大家フルードが、千八百七十七年、草する所の文にして、明に協商の精神を現示せり。然れ共是れ學者の說にして、實際に遠しと言ふ者あるべし。予輩はベルリン會議に一世の智を揮ひて、「平和と名譽」を齎し歸りたるビーコンスフヰルドの言を擧げて、英露協商の早く定れるを證せん。

「憶ふに亞細亞は、英露の爲さんと欲する所を爲すに十分の餘地あり。中央亞細亞に於ける露國の開發は、決して恐怖の眼を以て之を見る可からず。予は英人が印度を取りたると、露人が中央亞細亞を取ると、毫も相異なるの理を發見する能はざるなり。」

是れ彼が英國議會に爲せる演說中の一節に係る。O.K夫人之を評して曰く、「是れギルドホールに於ける儀式的演說に非ずして、責任重き議席の言論なり。伯の露人を好まざるは世の知る所にして、此問題に引證するに足るの言論極めて稀なり。故に欣然として此一節を此に擧ぐ」と。蓋し伯は一世の大策士なり。恐露政略は保守黨の外交主義にして、伯其首領たるが故に、常に露を抑制するの政略を取り、以て黨の勢力を維持し、多數英人の心を支配したるも、結局の目的は決して世人が想像するが如くならず。彼れの慧眼は、千八百七十六七年の間、夙くも英露協商の利を看取したるや疑なし。是の演說は圖らず其胸中の秘を洩したるに非ざるなきを得んや。伯にして然り。其政治的門生たるソーリスベレー、バルフオールが、露の事情愈々明瞭なる廿餘年後の今日に於て、英露協商を肯定すること、原と當然の事のみ。英露の猜疑は漸く散ぜんとし、其眞成の利益は衝突せざるなり。世人今日に於て、英露協商の報に驚くは、吾人之を近世政治史に暗きの過ちに歸せざるを得ざるなり。

第二五　結局の問題

日露の關係は上來說く所の如し。此の關係を知悉する者は、兩國の誤解に由來あり、此誤解の爲めに、無要の憂患を懷き、實地の政略を過つに至れることを覺るに足るべし。今眞成の局面を理會し得て。如何の方針を取るべき乎。吾人は之に答て曰はん。結局の問題は、實益問題に歸着すべし。英露獨佛が東洋に對する、皆實際利益を獲得するの目的にして、其外交も其示威も、要するに此範圍に出ざるなり。見よ、露が旅順大連を占めんとするは、是によりて太平洋に通路を開き、西比利亞の曠原を拓き、英國の獨擅利益を分割せんと欲するが爲めにして、英國が船艦を直隷灣に集合せしは、鐵道布設の特權を、支那政府より得んとするに在り。露の旅順大連を得るに對し、英の求めたる所は何事なるかを見よ。日本國民は露の爲す所を單純なる軍備問題として解釋したるも、英國は之に反して、旅順大連の占領其者に

抗議せず、唯之を世界開放の港灣とせよと要求したるは、貿易の眼を以て、之を見たるが爲めならずや。英露協商は、遂に南北に鐵道を布設すべくして、互に之を支吾せざるの基礎に定まりしにあらずや。

十九世紀の半迄、各國の外交は、勢力其者を問題とせり。蓋し人民の多數尙ほ國政を支配するの力なく、當路者の功名虛譽、戰爭の原因となりしが故に、實益に關せざる勢力の爭ありしなり。今日は國民の多數、和戰の利害を決するの程度に進みしが故に、實益を第一の問題となすに至れり。外交の方針一變して、虛譽功名の爭鬩を減じ、貿易工業の得失に移れるは、蓋し之が爲めなり。亞弗利加ファショダの問題、英佛の紛擾を釀したるも、結局平和に歸し。支那の問題、英露の不和と見へしも、遂に協商に終れり。而かもファショダ問題は殖民拓地の件にして、支那問題も、亦鐵道港灣の商工問題にあらずや。予輩は此點より觀察して、露國が東亞の經略を毫も意とせざるなり。吾人は此點に於て、英國の偉人フォックスの大膽なる宣

言に左袒する者なり。

「土疆廣く人口寡く租稅多からざる露國は、吾人の恐るべき敵に非ず。露國は、我の伐つべき敵に非ず。又我の伐たるべき敵にも非ず。首相(ビット)は蓋し土耳其の顚覆を恐れて、露國を伐たんと欲するなるべし。予は斯く信ぜざるなり。然りと雖假りに此事ありとせよ、此事は英人の害に非ずして、寧ろ其利たるを信ず。」

是れ千八百一年、フォックスが英國々會に公言せし所、何ぞ其明眼卓識なるや。爾來殆ど百年、バルカン半島に於ける對露英國正當の態度定まりて、フォックスの言、實にせられたり。吾人は信ず。露は獨力支那を顚覆せざるべし。支那自ら振はざれば、露が之を顚覆せざるも、各國之を蠶食するの勢を漸致すべし。各國之を蠶食せざるも、支那政府自ら潰滅すべし。何ぞ獨り露を患ふるを須ゐんや。且露が西比利亞を經略して其地を拓殖するは、日本の害とならずして、我利益とならん。西比利亞は農國として開かれん。其工業は製造を以て立たずして、鑛業を以て起らん。

日本今より工業製造を勵まし、海運を進め、東洋の商工業國たるを得ば、西比利亞の農民焉ぞ我良顧主たらざらんや。英人由來關係を支那に保たんと欲す。是れ其要地に鐵道布設權を得んと望む所以なり。今や幸に露國躬から西比利亞鐵道に多額の資金を投ず。鐵道其者は收利の目的に適せざるも、其損失は拓地の利益を以て償ふの計算なるべし。是れ蓋し露人の此企業を斷行する所以なり。其人口繁殖せば、彼等は消費の物品を何れに取らんとする乎。日本能く海上の勢力を保ち、外は平和を好み禮讓を重ずるの國民となり。內は商工業の物產に富み、饒に之を出し、廉に之を賣らば、露領は日本の好市場たらざらんと欲するも豈得可んや。是れ吾人がフォックスの宣言を日本の國是に適用し、露は我伐つべきの國に非ず、又我は露に伐たるべきの國に非ず、露領の開殖は、我の害に非ずして、我の利なりと言ふ所以なり。

吾人は此に我國是として左の數言を宣せん。曰く、

正義を基礎とし、平和を主義とし、實業を方針とし、教育を勵まし、智德を進む

べし。

萬國の間に介立して、東洋の文明國たる所以の道豈他あらんや。」

日本と露西亞續論

第一

歐米國民の日本國民を視るや、其觀察に種々の殊別あり。東洋の美術國を以てせし者あり。異教の武裝國を以てする者あり。支那の屬邦と誤認せし者あり。侵略の野心國を以てする者あり。日清戰役以前は支那の屬邦視し、東洋の美術國視したる者尤多し。然るに眇焉たる嶋國が、尨大なる大陸國を擊破せし以來、是迄愛すべき美術國視せられ、物の數ならぬ屬邦視せられし者、一變して油斷ならざる武裝の野心國と見做さるゝに至れり。三國干涉の起らんとするに先だち、獨逸帝をして、異教國民の東方に起りたるは、基督教國の警戒を要すと謂はしめ、寓意畫を作らしめたり。露廷をして、島帝國が大陸に侵入するを如何に防禦せんと開議せしめたり。

歐人は、事業に執着する點より見れば、膽汁質の如くなるも、觀察に敏捷なる點より見るに、神經質なり。獨露二國は、先きに日本を眇視したるに引替へ、意外に恐怖の念を長じ、一轉して疾惡を起せり。此感一とたび發す、勢其聰明を暗まさゞるを得ず。三國の干涉は、二國畏怖の心、之が動機たりしこと疑ふ可からず。

我日本人の短所は、一時の感情に激し、忽に熱し忽に冷へ、昨は怒り、今は笑ひ、機の一とたび變ずるや、往事を忘るゝに在り。三國干涉の當時、無識の軍人と無氣力の政治家、相緣りて、國家永年の策を過てり。政治家の胸中、必しも事を大陸に企つるの決心あるに非ず、其本心は寧ろ露と和し、獨佛を友とし英米と親み、平和を東方に保たんとするに在り。然れ共一旦戰捷の果實を三國干涉に失ひ、不平の氣、胸中に生じたる武人は、國家永久の政策に、何の考慮も無く、無意識に臥薪嘗膽てふ不祥の文字を口にし、戰捷の醉未まだ醒めずして遼東の拋棄に平かならざる國民は、漫然之に和するの聲を揚げたり。自信なくして、唯機に投ずるを能事とする政黨、之に乘じて、民望を博せんとせり。形勢此の如し。無氣力の政治家、心に其非策を知るも、斷然之に反對して、無謀の軍備擴張を抑制する能はず、以て陸軍五十餘萬の設計を成すに至れり。是皆熟慮の結果に非ずして、一時感情の發現に外ならず。然れ共神經過敏の歐人、如何ぞ感情の發現と解釋せんや。日本國人は大陸攻略の非望を懷けりと思へり。他日東洋の穩波を破り晴天、雷霆を驅るは、日本國ならんと惟へり。猜疑の我國を纏ふ所以の者、實に此時より初れり。吾輩は斷言す、日本國民は、大陸を略取するに意あるなく、大陸の略取は、決して日本國民の利益に非ず、既に此心無しとせば、東洋方面に於て、日露の利益、決して衝突すること無し、其利益衝突なくんば、何の爲めに二國相鬩ぐの要あらんや。既に相鬩ぐの實因なくして、相鬩ぐの疑ある所以の者は何ぞや。二國互に他の心術を誤解して、相畏怖し、陰に相備ふるが爲めなり。而して其眞相を商權するに、多くは無根の風說を誤解するに出づ、是豈二國の憂のみならんや。實に東洋大局平和の爲めに患ふべきな

り。吾人は、我日本國民が、深思熟圖して、大局の爲に日本永年の大計を確立公宣し、文武二途の施爲を此大計の基礎より算出せんことを切望する者也。支那問題の解決に先だち、日本前途の方針を確立するの必要あり。此方針確立せば、支那問題、及を迎へて解くを得ん。吾輩が今に於て之を言ふ所以の者は、再び國民が一時の感情に動くを恐るゝによるなり。無氣力の政治家が無識の武人に政治を左右せられんことを恐るゝによるなり。吾人の此言を爲すは、支那問題の底下に、內外思潮の急流を見認むるによる。豈故さらに平地に論波を揚ぐる者ならんや。

第二

英露の二國が、世界の各方面に勢力を爭ふは、今に初まるに非ず。遠くは露が土耳其の方面に迫るに初まり。近くは波斯の地方に中央亞西亞に、皆角逐競爭あり。北清は最近の對壘地たり。露の遼東を占むるや、英は對岸の威海衞を戍れり。蓋し露の領域宏大なるも、其良好の海口無きに苦むや久し。故に其東西兩方面に、海口を開かんと欲し、之によりて海上に英に對せんとするは、露の望宿にして、其君臣上下の志此に存するは、露人として決して無理の冀望にあらず。英人が海上を獨占すべき天命あるが如くに觀じて、自ら經營するは可なりと雖も、之を以て露の海口を得んとするを斥けて、非望野心なりとするは、正當の抗辨に非ず。露人が之を憤るも、決して理無きに非ざるなり。

然るに英人非難の口喙に倣ひて、我國人が露を天然の敵と誤解する如きは、是れ斷じて沒意義の主張なり。我國の外交論家中說を爲す者あり。曰く『我日本は單立獨行する能はず。宜く外國と同盟して、互に勢援を相爲すべし』と。而して英露相疾むを見るや、英と轡を駢べて、露に抗すべしといふ者あり。露と同盟して東方を經略すべしといふ者あり。予輩は此二者の何れにも同ずること能はず。英露相鬩ぐは、二國人が其利害衝突すと信ずると、曾て雌雄を戰爭に決せる歷史の記憶あるに

よる。且歐西列國間合縱連衡の關係久く存して、互に控制する者あり。獨佛相疾むの史蹟ありて、獨墺伊三國相親めば、佛は勢ひ露に近づかざるを得ずして、佛英の疎情は益々英露の離隔を促すが如く、錯綜紛糾の關係を生ず。此間獨り合衆國が、世界に濶歩して、親疎の區別なく諸國を友として、又諸國を憚からず、其國是を實力發達の基礎に立つるは、立國の經歴然らしむる者と雖、亦地勢の諸國外に超然たるか爲めに非ずや。英露の相鬩ぐは、二國の不幸と雖、亦疆遇の然らしむる者とす。其れすら近年の趨勢は、之を五十年前の狀態に比するに、大に變化を呈し、英國の中、英露の二國は、天然相容れざるの敵國に非ずと唱道する者あり。此論年を逐ふて長ずるのみにして、曾て其衰ふるを見ざるなり。唯二國接觸の地域界線洪大なるを以て、一所の紛議は他所に影響し。時に互に惡感を激成し、鐵火によりて之を決せんとするの論、二國の中に絶へざるのみ。

近時英領統合の風潮盛なるにより、隨て威を四邊に立つるの氣揚がり、露と爭衡せんとする說、其間に出づ。而して東洋に新興の日本を同盟せしむるは、英が此方面に露を制するに至便なるを見るや、其曾て清によりて露を制せんとせし態度を一變し、專ら日本に賴るの說起るに至れり。英以人爲へらく「日露相鬩ぐは必至の勢なり。此間、日によりて露を制せん」と。而して日本の論客亦過去の夢を攪破せずして、無意義に露を忌むの餘り、英によりて露を制せんと說く者、絶へて無しといふ可からず。英人早計に是等一二の說を信じ、日露の破綻免れざるべしと評する者あるは、畢竟速了の見といふべし。

抑世界に風說を廣布するの勢力尤强き者は、英米二國の新聞なり。故に此說二國の間に流行し、延ひて世界の中に及べるは、英人の先づ日本の眞情を誤傳せるによらずんばあらず。今其一例を左に擧げん。

「日露兩國の角逐、及び將來之より生すべき事變は、又絶東の時局に於て注目を要する一要素なり。露國との衝突早晩免るべからずとは、久く日本人の自ら感ず

る所なりしなり。是れ宛も千八百六十六年、普墺の大戰爭を來せし事前の情勢に類す。普墺の問題は何れか獨逸の盟主たるべきやといふに在りしも、日露に在ては遠く清國に有する双互の企畫は姑く措き、先づ孰れか朝鮮及び黄海を領有せざる可からざる乎といふに存す。論者は此に見て、戰の開かんとして未だ開かざるものは、唯露國は準備の全からんことを待ち、日本は亦好意的中立を期する英國の南弗戰爭に顧みる所あるが爲なりといへり。然れ共此二大國の傾向に於て、目的に於て、意思に於て、此の如く正に相反すとせば、孰れも自ら開戰の時機を選擇するを許されず。時機一とたび至れば復た之を逸すること能はざるべし。」

（六月七日龍勁タイムス）

世界の政論を動かすに足るべきタイムスの所說此の如し。露人之を讀で、不安を懷くこと果して幾何ぞや。而して今日の日本、曾て此片影だもあること無し。公平に日本の形勢を査察し、眞摯に其事情を告白せば、日本の政治家軍人論客中、此意氣を負ふ者あるなしと確言するを得べし。却て北清の事變にすら、列國の意を憚りて必要の救援軍を出すに踏跙せしを、予輩は實見するなり。然るに日本が露國と戰意を決し、唯英國南弗の戰あるが爲めに、戰機を延引すと許するに至りては、其妄も亦甚だしと言はざる可らず。英人の誤想乎。抑日本を誘ひて英對露の渦中に投ぜんとするの策論乎。

第三

俠義勇敢生を輕じて名に殉するは日本國民の特性なり。是れ其長所として、優に他に誇るに足るべし。然れ共名に殉するの氣象は、動もすれば他の毀譽に支配せられて、眞個自己の實益を忘るゝに至るとあり。是れ豫め警戒せざる可からざる所なり。近時日本軍隊の勇敢、外人の賞讃を博するを傳稱し、漫に欣躍抃舞せんとする者あるは、予輩の同意する能はざる所とす。此の如き機會に於て、國民は須く冷靜の考慮

を運らし、永年の利害を熟圖し、其勇敢の名を博せる結果、何の影響を外に生ずる歟を思はざる可からず。豈泛々たる一時の好評に甘ずるを得んや。

蓋し我武力の强鋭、外人豫想の外に在るとは、二種の影響を生ずべし。我を味方とするの利を感ずる國は、分外の好意を我に表して、共同利害の關係を作らんと願はん。其敵とするを疾む國は、分外の猜忌を生じて、畏怖の念益々長せん。是れ我國民が、一切の空想を拂拭して、自國眞成の得失を考案し、以て永年の長計を決すべき時機にあらずや。想ふに東洋の問題は、唯北清目前の變事に止まらず。列國對清の處分案其裏面に横はり、日英露の離合案、更に其背面に存す。我日本の對外方針を定めんとせば、先づ英露に對する方針を定めざる可からず。

抑英露相疾むは、歴史の記憶と、利害の關係あるによる。我日本は、二國に對して何の恩怨無し。故なく其一に黨して他に抗し、進で他國爭鬪の渦中に投ぜんとするは、尤謂れ無き者なり。我國人英米の文書を解する者最も多く、アングロサキソン對スラヴの問題に於ても、平生多讀誦習する文學に動かされて、自然にサキソン人種に同情を有し。此同情は一轉してスラヴ人種疎斥の影響を生ぜざるを得ず。予輩は文明の程度に於て、アングロサキソンを高とし、自由の精神、獨立の氣象、是等の點に於て皆アングロサキソン人種に與みせんとす。然れ共其スラヴ人種に相對するに於て、スラヴ族の發達を忌妬し、露國の自營を罪惡視するに至りては、予輩之を是認する能はざるなり。スラヴ對サキソンの利害問題は、吾人單に二國の爭として之を見ん。我日本國人が、自國の利害に關せざる、此爭鬪を分擔するの理、萬あること無し。日本若し何れの國を味方とするも、何れの國を敵とするも、唯日本國民の利害を中心點として、之を打算せざる可からず。

予輩の見を以てするに、日本にして東洋大陸に野心を有せざれば、何れの點より見るも、露國と利害の衝突無し。其之あるが如くに論ずるは、大陸領治の政策を有する者に非れば、傳說より來る所の疾露的感情空想に過ぎざるなり。

我日本事實の利害は、朝鮮に在り。此半島と我九州の間に横はる海上權に在り。我商業航海の安全を此一方に確保するは、露國の異議無きを保つべし。蓋し露は日本を誤解して、大陸を略取し、露の東洋經略を妨ぐる者と想ひ、日本は露を誤解して、東洋諸國を呑噬し、日本の安寧を脅す者と想へり。是れ精確に商量せる事實の衝突に非ずして、相互誤認の過失より來らずんばあらず。請ふ露國が如何に日本を誤認するかの一例を擧げん。

「露國と到底相和す可らざるの敵、極東に在り。數年來既に公然吾人との戰鬪準備を爲せる日本是なり。此生意氣なる國の輿論益に新聞雜誌は、露國の西比利亞鐵道未だ竣工せず、軍備擴張策亦未だ完成せざるに先だち、日本の軍備充實したるを以て、本年夏こそ、露國と戰鬪するの好時機なれと公言して憚らず。吾人の注意すべきは、清國の拳匪に非ずして、日本の拳匪なり。此拳匪は、夫の歐洲より吾人に危迫する、他の一大拳匪(英國を指す)と等しく、大ひに備ふる所無かる可からず。ボーアとの戰爭首尾よく終結して、日本の同盟國視する英國の手を解くこと、近きに在らん。一の戰爭にて激昂したる英國が、他の更に美々しき月桂冠を得んと欲すること、恐らくは英國の一部政治家の豫言するが如くならん。されば近き未來に於て、吾人に取りて清國暴徒の擾亂の比に非ざる一大危難、恐らく極東に起らん。我兵を深く清國內地に派し、斯く屢々蜂起する清國の暴徒の騷亂を鎭壓する如きは、日本との戰爭の背後に敵を作るに等しくして、容易ならざる餘事を釀すのみ。稗史的の清國拳匪にあらずして、海國たる日英より、吾人に向ひ來る所の實際的の兵力こそ、是れ吾人の政略の敏察を要すべきものなれ。(中略)今日日本人の露國に對して、敵愾の氣熾なること、日清戰爭前、日本の清國に對して、敵愾の氣を挾みたるが如き比に非ず。(中略)日本人は、日露の戰爭を以て、到底避く可からざる者となし、其暴發すること早ければ、早きほど日本の爲に利なりとせり。露國は十分手段を盡して、此悲むべき事件の暴發を防ぎ、堅

く平和の旗を保持しつゝ、常に準備して、就中極東に其手を自由にせざる可からず。」

是れ露國每週新報ネデリーア雜誌、六月十七日の所論なり。如何に露が猜疑の眼を以て、我日本を視る乎を窺ふに足るべし。其猜疑は畏怖の基礎に立ち、畏怖は事實の誤認より來る者たるを理會せざる可からず。然れ共露人が眼前破裂せる北清事件を意とせずして、却て平和現存する日露の交誼を危ぶみ、清國を敵として、却て日英に對するの備を怠る勿れと警告する所、露人が東洋に對する現下心情の一斑を見に足らん。

第四

由來日本人が露國に對して敵愾の心を懷くは、種々の原因あり。英文を讀慣れて英人の恐露病に感染したること、幕末以來地の疆問題ありしこと、日本國民北邊を患ふるの觀念を、支那文學によりて、養はれしこと、近くは遼東朝鮮の事件ありしこと、是等皆我の感情を反動せしむる所以にして。露の日本に快からざるは、露人が日本の事實を英文に透看し、英人の過大の報告に驚駭するに在り。露國皇太子(今帝)に對する狂人の狂擧は、不幸の記憶を露人の腦中に印したり。三國干涉以後無、識の論者は妄に反露熱を煽ぎたり。我政治家は對計方針に準據して、軍備を設計せず。一時の風潮を利用して五十餘萬の陸兵を養成したり。而して露人は日本の文を解せず。日本人も亦露の書を讀む者少し。二國概ね中間に介する英國新聞を以て、互に其事情を管窺す、其誤解に誤解を重ぬること、決して怪むに足らざるなり。馬山浦借地事件と云ひ、樺太漁業事件といひ、日本が露の一擧一動作に疑を容るゝ者、後に至りて其眞相を明にすれば、前日過大の風說と、誤解の傳說たることを發見すること多し。西比利亞鐵道の進行を聞きて、强敵疆に迫るの想を爲す者あり。十五萬の兵、此方面に屯駐すと傳へたることあり。北清事變の發するや、露兵大擧して、

清領を掠むべしと想し者あり。然るに事實は此一派論者の豫想に反し、此方面の露兵其數意外に寡くして、運輸も亦便ならず、其領地の鎭撫に勞する姿ありて、大擧侵入の力なきのみならず、一面には露人が日本兵北清救援の必要を見認め、一面には恰も我の露を猜ふの心を以て、日本異心を懷くなきやを、彼が疑ふ程なるに非ずや。亦以て彼我の疑心猜忌が、多く相互の誤解に原因することを發見するに足らん。」

之を要するに、露國文明の程度は、歐西諸國より低く、其通信亦不便にして、國人の智見隨て狹く、邊彊に事を經營する文武の官僚に、疎野の行あるは眞なり。然れ共之を以て露廷の侵攻政略を表すると解釋するは誤てり。尨大の國には種々の異素を包有す。其一部の行爲を以て、直ちに其國民の輿論全部の行爲と爲し、之により て漫に敵愾の心を發するは、陋も亦甚しと言はざる可からず。北清の亂を以て一途に支那國民を敵とす可からず。邊彊露人の行爲を以て其國民の意思と誤解し、其本據を正して、彼等を反省せしむるを努めず、却て無益の猜疑を長ずるは、抑亦愚の

至にあらずや。米人が排日熱に罹り、英人が其殖民地に日本の勞働者を嫌忌するは、殆ど鎖國論の實行に類する者あり。然れ共吾人は是を以て英米の開放國是に些の疑念を挿まざるなり。露國の四彊に於ける、其形勢亦是に類す。予輩は我國人が露國の東洋勢力を過大に誤想し、誤想一進して畏怖となり、敵愾となり、眞成利害の衝突なき問題を執て、確執を長ぜんとするを嘆ぜざること能はず。之と共に露人が日本の眞情を誤解し、畏怖警戒するを笑はざること能はず。請ふ此中間に傳說廣布の大勢力を有する英字新聞の語調を見よ。

「日本は英國の利便の時到るを待ち、無用の抗議を事とせず、偏へに露國の行動に注目し兼ねて陸海軍の充實に專心せり。然れ共日本は何時迄も空く待つこと能はず。其政治家中には、既に緩漫無感覺の英國の同盟として、何時迄も何等得る所無からんよりは、寧ろ好ましからざるも、露國と利益を相分つの方針を執るの勝れるに如かざる乎を疑ふ者あるに至れり。乃ち若し英國たる者、亞細亞全土に

於て、露國より受くる所の凌辱を甘んずることあらば、啻に其時機を失ふのみならず、併せて同盟を失ふものなるを覺悟せざる可からず。（中略）旅順及び遼東半島の守備兵は、露國のヘラットより重を措く處なり。英國五萬の兵に加ふるに、日本五十萬の兵を以てせば、之を拔かんこと易々たらんのみ。日本は英國の信號を待て、朝鮮及び滿洲を顚覆せんとを期する者なり。（中略）日本は、英國の世界に有すべき同盟中、最も確實有効の同盟にして、舉止沈重、泰然として毫も慌忙の態なく、一たび英國の信號に接せば、蹶然起て事に從はんと擬す。此震天動地の大戰鬪を起すは、今の時實に好機會にあらざる乎。」

是れ英人ブールジャーが、北米評論雜誌に掲ぐる所の論旨也。英國に此方針を說く者あるや、一日の故に非ず。而して此論の如きは、其尤切迫せる者なり。

「英露開戰の場合に於て、日本を英に同盟せしむるは必要にして、樺太を日本に進呈せば、日本を誘ふことを得べく、而して樺太を露國より奪ふことは、極めて容易なり。然れ共支那の同盟は必要缺く可からざる者とす。支那は、太平洋海岸及び黑龍江邊に於て、英國が略取する地を得んを望むべき乎。又は上緬甸を得んを望むべき乎。其何れにせよ、望む所の地を約して、我に同盟たらしむべし。」

是れ十三年前、チャールス・ヂルクが歐洲現狀論に明言する所にして、日淸戰爭以前迄、英國が心を傾けて、支那を輔翼したる所以の本意も、亦此精神に外ならざるなり。今や東洋の形勢大に變じ、支那を先手として對露の英利を保つ可からざることと瞭然となりたり。英國が意を傾けて日本に親善する所以の者、豈偶然ならんや。而して英國海上の勢力、天下敵無しと雖、陸兵を東洋に要するに至ては、我日本に屬目するの外無かるべしくて、今回の變に於て其感特に深きを加へしならん。露國は英人の志、此に在るを知る、焉ぞ非常の危險を感せざることを得んや。ネデーリア週報が、大匪小匪を以て英日二國を目するの偶然に非るを見るに足るべし。

第五

予輩が平素アングロサキソン族の好氣象に全幅の同情を有するにも拘らず、其對露の感情に反對する所以の者は、日露眞成の關係より打算して、誤解の爲めに實利を犧牲にするを避けんと欲するによるなり。人種、慣習、風尙、宗敎等、一切の點に於て、米國は英國と親善の關係を有す。英領統一主義の首領チエムバーレーンは、特に英米の關係を篤くせんと努むる人なり。英國に此有力なる主張者あり。米國も亦英を以て、好意同盟の國となす。然れ共其東洋に於ける米國の政策は、曾て英に雷同することなく、英も亦之か爲めに米を疎外することなし。是れ各國其自家の位置より打算して、各自の利益を保全する愛國の情念より來る者とす。米の露に於ける、一は自由平等を國是とし、一は擅制階級を制度とし、一は信敎自由を公許し、一は希臘敎を國敎とす。其の異なる點、一々枚擧す可からず。然れ共國際の關係に

於て、米露の親善なるは、英米の親善なるが如し。是れ畢竟二國の利害、互に衝突するを無きによらずんばあらず。予輩が英國一派の對露感情(寧ろ多數の感情)を斥けて、我日本が斷然露と親善なれといふは、之が爲め也。敢て之を以て英と疎遠なれと言ふに非ず。例せば今後北清の事局一轉して、列國對清善後の策を講ずることとならば、我日本、東洋方面の利益を保全するを以て主眼とし、英米佛獨露の何れに拘らず其提携すべき者と提携するの自由を保有すべきなり。予輩の見を以てするに、支那を政治的に分割領治するの高手を用ゐず、之を經濟的に經營し、四百州を開放して、世界の市場と爲し、以て相互の貿易を盛にし、又交通の便を開き、自由の氣を疏し、行く〳〵は四億の民衆を引立てゝ、其自治能力を發達せしめんこと、吾人の願にして、又日本國民永年眞成の利益なるを信ず。之を政治的に分割し、屢々混雜叛亂を引起して、其鎮撫に勞し、又各國權力の衝突を此間に生ぜしむるは、決して我の利にあらず。是目的を達する迄に、各國聯合監督の下に、支那政府を保

護するの必要起ることあるべし。苟も此目的を同くし、列國の利益と共に、我日本の利益を重じ、我に同意する國民あらん歟、英米佛獨露其何れを問ふを要せず、親善提携して、東洋經營の事業を共にすべし。苟も之に反して、好で禍根を播き亂源を開く者あらば、我は同方針の諸國と聯合して、其匪謀を阻するに努めんのみ。此間豫め親疎の別を立てゝ、感情の爲に理性を暗まし、傳說の爲めに利益を犧牲にするは、予輩の斷じて取らざる所なり。日露の間豈解く可からざる舊怨あらんや。豈爭はざるべからざるの宿題あらんや。

殖民新論

欠

第二　人口と人格

我日本が維新以後、初めて全國の人口を計りたる時、三千五百餘萬と計算せられたり。維新以前は人口計算の事に重きを置かず、且封建の代、三百諸侯地を擁して各方に割據し、疆を越れば、外國の如き感ありしを以て、全國を通じて人口を知るの必要なかりしが、明治四年、郡縣の治成り、西洋の政制を採用するに隨ひ、地積人口を確知するの要を感じ、此に人口計算の擧ありし時、三千五百萬と報告せられたるなり。其後新たに入りたるは沖繩一縣あるのみ。北海道は千島我に屬し、樺太露に歸して、地積に變化ありしと雖、此出入の爲に人口に格別の差異なければ、總額に於て大略變化なしと言ざる可らず。然るに明治三十年十二月三十一日の調査によるに、全國の人口四千三百九十七萬八千四百九十五人とあり。此計算には勿論臺灣を算入せざるものとす。之を明治の初年三千五百萬と比較するに、八百餘萬を增加せり。

欠

明治五年より三十年迄、二十五年間、平均毎年三十二萬人を増加せる割合にして、此差は漸次に強きを加ふる者なり。近き五ケ年間の増加は左の如し

四二、〇六〇、九七六　（二十六年）　四二、四三〇、九八五　（二十七年）
四三、〇四八、二二六　（二十八年）　四三、四九九、八三三　（二十九年）
四三、九七八、四九五　（三十年）

即ち近年に於て、毎年四十萬より五十萬を増加する者にして、此の割合は今後愈々進むこと疑なし。夫れ富は自然力と人力との抱合に成り、資本と相待つて増加するが故に、人口即ち勞力の増加は、一面より見るに富の増加を意味するといふも不可なるべし。若し増加の人口を養ふの天資無ければ、人口の増加は、自然に止まざる可からず。故に人口の増加は國力増加の好望ありと觀て可也。但富の増加と人口の増加と相伴ふや否やは、別箇の問題也。人口の割合よりも、富の多く増加する國あり。富の増加より人口の多く増加する國あり。我日本は人口の増加、富の割合よりも多き者にして、佛國の如きは、富の増加、人口の割合より多き國なり。而して富も人口も、共に増加する尤多きは、合衆國なるへし。但合衆國は移住の爲に増加する人口非常に多ければ全部の増加を出生人口と計算する能はずと雖、其出生のみを以てするも、確に諸國の上に在り。是れ合衆國の富資と共に國力の上進する原因にして、佛國が富の増殖の如く、國力の膨脹せざる所以を説明するに足らん。我日本國民は此點に於て、決して失望の位置に立つ者に非るなり。

然りと雖、國力を構成組織する所以の元素は、夥多にして單に一ならず。單に人民に蕃殖力ある一事を以て、強盛殷富なること能はず。熱帶地方、地積廣くして衣食費少き國に於ては、人口蕃殖すること容易にして、此一點のみを見るときは、有望の人種に類似すと雖、其國運を見るに、印度の三億の人口は、十五萬の英人に支配せられ、同一の運命は、安南、暹羅、ジャワ、ボルネオ等に在り。是れ其人口の多寡に關せず、其人格の高下によりて、國運の消長を決するを見るべし。吾人の我日本に

望む所は、人口の増殖と共に、人格の上進を期するに在り。我國土は政治上現在の版圖に止まるも、苟も人口人格予輩の所期に適合せば、日本民族の蕃息と共に、國運の興隆決して期し難きに非ず。

第三　日本民族の今古

我日本民族は、無氣力退縮の天性あるに非ず。近代內國に局促して、島嶼の生息を甘じ、海外飛揚の氣象殆ど絕へたるは、德川氏二百五十年の治下に、鎖國の政略を嚴施し、大船を禁じ、交通を絕ちたる人爲施設の結果にして、決して人種固有の性に非るなり。遠く古に遡れば、神代に於て、諸神が巖樟船に駕して、天地の間を上下したりといふは、大和民族が、絕へず大陸又は南島と通航往來せし傳說たるを疑ふ可からず。降りて人皇の世に及びても、神后が三韓を征して以來、朝鮮と兵馬外交の政治的交通あり。使節を隋唐に遣はしてより以來、支那と文治的外交の往復聘問あり。此時代は、往來不便の故を以て、官船に托する者の外は、海外に赴くを得ず、一切の事、官府に專管せられ、人民自營の業なきを以て、人民各自の往來絕へて無かりしと雖、儒生僧侶が業を海外に修めて、文明誘引の媒介となりしこと多く、

特に僧侶に至りては、草莽勇敢の少壯者を多しと爲す。中古支那の壞亂と、我內國の紛擾によりて、內外の交通中絕し、北條氏の時代に外寇の難あり、之が爲めに彼我仇敵の情熾に、其末葉より足利氏の初代迄、我邊民支那の沿海を擾亂して支那政府之を鎭むること能はす、明氏我足利氏に依賴して僅に逮捕の功を擧ぐるとを得たり。足利氏の中葉より、戰亂暗黑の時代に入りて、內治統一なく、海外の事又我に知られずと雖、我西邊の民自在に支那の沿岸を侵せしなるべし。豐臣氏旣に海內を戡定して、兵を朝鮮に用ゐ、大兵八道の山河を蹂躪して、遠く四百州を震怖せしめたり。中道將星墜ちて、德川氏の世となり、僅に一縷の通交を支那朝鮮に留めたるのみ。概して鎖國の中に封ぜられ、國民は日本域內に閉居するのみならず、其域內又三百の領國を割して、足自由に封外を踐む能はざること、二百五十餘年。此間山田長政の壯擧、伊達政宗の雄圖あるも、畢竟個人的奇例にして、一般の日本民族は、島內封鎖の第二天性を鑄成し、日本國內を世界と感ずる狹隘國民となれり。此の民族は智に於て宇內の廣さを知らず、情に於て數里の外に出づるを欲せず、此第二の天性は、僅に嘉永安政の間、外交の新局面を開く頃より、變化を受け初めたりと雖も、二百五十餘年養成せる天性を、四十年間に全く打破する能はざること勿論なり。

維新以後、政治貿易交通、皆資を海外に取り、就中敎育に於て、世界の智識を誘引し、其結果は、今日智に於て八洲以外、五洲の大なるを知るを得たりと雖、情に於て思を海外に馳する迄に發達せざるなり。而して一方を顧るに、人口は每年五十萬內外を增加し、今後其割合更に强く增進するは疑ふ可からず。地勢は島國なり。政治上の區域は、之を擴むること至難なり。此增加する人口に對して、經營安息の舞臺を給せんと欲せば、海外殖民の一途を措きて、他に永久の良圖ある可からず。日本民族は天性に於て海外に馳驅する能はざる者に非ざるは、神代以來の事蹟に昭晰なりとす。而して今後此殖民の目的を達するに於て、妨となる所のものは何ぞや。予輩以爲へらく、政治に於ては武力的膨脹の迷想にして、社會に於ては家族的移住

の慣習なきこと是なり。予輩請ふ進て其理由を説示せん。

第四　武力的膨脹と平和的膨脹

我國の論者は、海外の經營を以て、一に之を政治的作用と爲し、政治的作用を、平和的交道と爲さずして、之を武力的侵掠と解釋せり。是れ根柢の謬見と雖も、從來の歴史に於て止む可からざる者あり。往時の經過としては、之を恕すべきも、之を將來の方針と爲さんには、是れ我國民を率ひて左道に入らしむる者。予輩豈一大痛棒を、是等蠻見論者の頭上に加へざるを得んや。

蠻力競爭の時代に於て、民族の移殖は、侵略を意味するが故に、其時代に於て、一時成功の例無きに非れ共、一と度此時代を經過せる以後、其新時代に適合する移殖は成功し、之に反する者は失敗す。北人が羅馬の版圖を分領せるが如き、天孫人種かコロボックル土蜘蛛アイヌに打勝てるが如きは、往古に屬す。人文開發の時代に於て、平和的移殖は武力的克服に優る者比々皆然り。予輩は同時代に於ける顯著

の例を引證せん。西班牙の英吉利に於けるは、其一に算ふべし。英人の米洲東部に移殖するや、故國に自由を得ざる者が、精神の自由を得んと欲して、荒土を拓くに起れり。彼等は其勞苦經營を積で、衣食住を得たる者なり。其最も摸範的人物はウキリアム・ペンを首領とせる一體なるべし。彼れは自己と智能懸隔せる土人に對するも、一切の詐僞狡計を以て彼等を待つ可からざる旨を部下に宣命し、貨を土人に與へ、其承諾によりて荒土を讓り受けたり故に慓悍猛暴を以て歐人の恐怖せしインヂアン（土人）も、ペンの一部落には友情厚かりしといふ。嗚呼何ぞ善俗良風の人を薫する此の如く其れ大なるや。彼等の殖民部落は、現時ペンシルヴェニア州の基礎にして、其ペンシルヴェニアの名は、ペンの紀念として起れる者なり。後年ゼフエルソン、フランクリン等の名賢集會して、獨立の檄文を議定せしは、此の市府フキラデルフキアにして、此市府は實に米洲の首腦地として、此に新紀元を開き新繁榮を起し、今日に至る迄、平和の清泉を漲らすは、當初ペンが平和的殖民の基礎を立たるに萠芽せずんばあらず。

之を西班牙が墨斯哥白露を征克せし歴史に對照せよ。墨白の土人は、米洲に一種の文明を開き、之を保有せし人民也。其家屋道路技術富資、決してインヂアンの比に非ず。西班牙國人は、此文明を推重するの念、毫末も之無くして、コルテスが墨斯哥に入り、ピザルロが白露を侵すや、家を火にし人を屠り、土人の蓄へし富資財産、其開きたる土地鑛山を一舉に占有したり。其一時赫々の功を示せるは、ペンが諄々として侵掠の禁を部下に訓示せしに比するに、一は戰捷の英雄に類し、一は朴魯の村夫子に似たり。我國一般の論者をして之を見せしめば、誰かコルテス、ピサルロの武功を艶稱して、ペンの無策を冷評せざる者ぞ。然れ共墨斯哥は、侵掠の開幕より、西人と土人の爭鬪絶えず。既にして土人を殺戮征服して後、殖民間の爭鬪を生じ、引續きて西班牙と分離したるも、四百年後の今日に至る迄、國運擧らず、地は合衆國に削られて疆域縮り、人口稀疎、田野荒廢し、ペンの移殖せし隣邦の後

へを望みて遠く及ばざるを嘆ずるなり。白露の運命も亦然り。墨白の政治家にワシントン、リンコルン起らざる也。其發明家にフランクリン、ベル出でざるなり。是其故何ぞや。平和の移殖には、家族的發達あり、勞力尊重の風習あり。之に反して侵略的膨脹は、漂泊人種を增加し、他人勞力の結果を搶奪するの惡習長ず。永年の競爭に於て、一は人口增加せずして財力縮まり、一は人口蕃息して富資殖す、其國運の盛衰豫め知るを得べき者あり。吾人豈二國の盛衰を怪しむを要せんや、惜ひかな、我日本の膨脹には、古來武力的歷史ありて平和的歷史なし。其日本民族が島內に閉居して、三千年間同一の小日本たるは、當然の結果と言ふべし。

第五　武力的膨脹の失敗

我日本の史家は、征克膨脹の事迹を艶稱して、其後年の失敗を詳論せざるなり。故を以て、今日の日本國民は、此舊想の範圍內に彷徨して、其失敗が必然の結果たることを覺らざる者多し。神后三韓の出師は、單に遠征の史蹟として之を見るべきも、其後年の關係は、百濟任那を援けて、新羅高麗と戰ひ、其結果敗績の事蹟に終り、日本民族は、嘗て半島に根據を建つる能はざりき。和寇が明の邊疆に入り、威を一時に震へるも、一旦掃蕩せらるゝ後、大陸に些の痕迹なし。豐太閤の朝鮮を伐つや、八州風靡するも、結局何の獲る所無かりき。是れ明兵の來援せると太閤の薨去せるとによると雖、假りに太閤世を永くすること數年にして、明兵撤退すとするも、彼れの遠征は、一時の克服に止まりて、永遠の拓地に毫も補無からんとす。遠征の半ばに於て、既に絞撫の功擧らざるを嘆ぜる黑田孝高あり。彼の言に曰く『諸

將功を爭ひて兵士劫略し、韓民亂を避けて山谷に遁れ隱る。土地荒れて人民散ず。國土を得るも何の益あらん』と。太閤之を首肯すといへば、武力的膨脹の時代に於てすら、尙ほ單一なる征克の國土擴張に益なきを知ること、二雄の如き者あり。古來日本の膨脹、此の覆轍を踐まざる者なし。其民族の海外に蕃息せざる、豈怪むに足らんや。之を要するに、日本民族は膨脹突出の性質無きにあらざるも、移殖蕃息の資格無し。日本史上、武力征克の紀念あるも、平和經營の模範無し。是れ今日に於て、人口中に溢れんとして、適切の救濟策を立つる者なき所以の原因なり。

今代の史上、殖民の成功せる者、サキソン民族に如くは無し。其西陸に合衆國とキャナダを起し、(合衆國現時別立すと雖も、民族としては之を同系統に立てざる可からず)、東陸には印度帝國を立て、南陸には濠洲の殖民を拓く。我國の論者、我舊史を誦習して、英民の拓殖を武力的膨脹と解釋せば、太甚き誤解なり。英民の拓地は、先づ平和の移住に起り、人口蕃息して、疆域の爭、商利の競を生じ、此に他國と衝突を引起して、戰爭となれる者多し。先づ戰爭によりて土地を收め、然る後に人民に移住を奬勵したる者、英國殖民史中、嘗て之を見ざるなり。見よ、濠洲は終始平和の膨脹にして、印度の殖民は千六百三十六年、英醫が國君公主の疾を療して、商業の特許を得たるに起因す。是れ純然たる開市に起り、人民の運動に起り、平和の交通に起れる者なり。其兵馬を用ゐたるは、遙に後年に在り。政府の統轄は更に其後にあり。米洲の殖民が、獨立移民の經營に出でたるは、普く世人の知る所とす。

是によりて之を見るに、克征は民族膨脹の原因に非ずして、民族の蕃息之が原因となり、後に至り、政府之が保護の必要を生じたるを覺るべし。最近に合衆國が地を西印度に擴めたるは、米人が西班牙を伐ちて、玖馬を取りたるによる。然れ共之を以て、單に兵馬の克服と爲すは誤れり。西班牙政府、善く其屬島を治めざるが爲めに、島民米國に內附せんを懷ひ、米人の資本島內に放下せられ、米人の島內に移住する者亦甚だ多く、交通商業既に米國化せし結果、此に至れるなり。其干戈を用

ゐたるは、唯其の既に成るの勢を確定せしに過ぎず。而して布哇群島の合衆國に入りしは、平和的膨脹の較著なる適例なり。然るに菲律賓の孤弱を以て、米國尚ほ之を定むるに苦むは何ぞや。亦唯平和の移住なくして、克征を事とする結果に外ならず。嗚呼合衆國の强盛を以てすら、孤弱の島國を制するに苦むを見れば、我日本國人が古史を追憶して、武力的膨脹を夢みるは、豈惑へるの甚しきに非ずや。

第六　平和的膨脹の一種

予輩は、平和的膨脹によらざれば、永久國民の勢力を海外に擴張する能はざるを確信する者なり。此信仰が日本國民を支配する迄は、移殖の事得て談ず可からず。見よ二十七八年戰役の結果、支那に我居留地を擴め、臺灣に我新版圖を得たるも、居留地は草萊繁茂して、其人家は支那の賃借人多く、臺灣は拓殖の功未だ擧らずして、草賊の鎭撫尚ほ完からず、其實益は却て新附の支那民族に歸せんとす。此の如くにして尚ほ新地を政治上兵略上に擴めんとするは、方針の誤まれる者に非ずして何ぞ。平和膨脹の一策として、移住を奬勵するの新風潮起れり。某々の移民會社と稱するは、皆此潮流の支派餘沫なり。是れ果して予輩が冀望する目的に適合する乎。曰く否な。其武力的ならざる點より觀るに、之れを平和的膨脹の系統に入るべしと雖も今日の所謂移民は、眞實の意義に於て移民に非ず。唯是れ勞力を他人に賣る者に

過ぎず。蓋し他國に移住して其地を第二の故郷と爲し、事業を經營し、家族を蕃息し此に新社會を建設するの覺悟あるに非れば、之を殖民と稱するを得ず。之を聞く、殖民の準備に三要事あり。曰く病院。曰く學校。曰く墓地是なり。病院は現住者の健康を保たんが爲めなり。學校は其子孫を敎育せんが爲めなり。墓地は骨を第二の故郷に埋めんが爲めなり。終りの二者は、共に後嗣と身後の爲めに準備する者にして、悉く永住の計に非る無し。蓋し子孫を敎育して、後代迄の安樂鄕を建設する者に非れば、殖民を海外に成功する能はず。今日我民族の外に出づる者は、全く此原則と背戻す。朝鮮に入る者は、我國勢の彼より優强なるを利用し、韓人の勞力を奪ひて、一時の奇利を博せんとする漂泊浮浪の徒多きに居る。倖に其所期の利を得れば、携へ歸りて身を我島內に安處するを望む者なり。米國布哇南島西比利亞に赴く者は、土工請負人の下に賃銀を取るに非れば、契約雇主の下に、甘薯珈琲等を賃作する者なり。是等の徒は所謂出稼人にして、移住民に非ず。其多くは無妻の人にして、到底家を其地に建て、族を養ひ子を育する種類の者に非ず。其賃銀は之を我島內に送りて、歸國以後の計を爲す者なり。誠實に働き眞面目に貯ふるも、其根柢の意思原と家族を率ひて、海外に第二故鄕を造る者に非るが故に、之によりて島國以外に、日本民族を殖するに足らざるや明なり。況や其多くは不規則の媒介により、無責任の徒を外出する者たるに於てをや。

事情此の如し。故に現今の出稼は、平和的膨脹の中に列するも、人口增殖の必需に應ずる者に非ず。又民族膨脹の方法と見認むること能はざるなり。

第七　殖民主義

主義は行爲の指導者なり。主義の是非は、行爲の成敗を決する所以の原因たらずんばあらず。英國の殖民に成功せしは、其主義平和的商業的家族的なりしにより、西班牙の失敗せしは、武力的劫略的個人的なりしによる。其數百年間の經歷中、英國殖民に戰鬪の時代あり、西班牙の殖民に平和の時代ありと雖も、其第一歩の主義は二國殖民の性質を一貫して成敗の原因たらざるなし。而して古今殖民の成敗、皆予輩の觀察を證するに足る。英人ゴルドウキン・スミス曰く『フェニシア人の殖民は製造所設立主義也。羅馬人の殖民は駐兵主義也。西班牙人の殖民は、奴隷をして金鑛を發掘せしむるに在り。佛國政府がアルゼリー殖民地の物産を、英國の萬國勸業博覽會に出品せし時、之を佛國陸軍省の出品部に置けり。希臘の盛時に於ては、殖民を本國人と同等に待遇して、同等の自由市を建設したり。英國が本國と殖民との

聯絡緊密にして、分裂の患無きは、之を待つに自由制度を以てし、高尚の精神存するによるなり」と。（米國殖民基原論）西班牙の事は言ふに足らず。抑佛國が文明の上流に居り、諸般の事物に於て、優に列國を凌駕するに足るも、獨り殖民の一事に於て成功少き所以の者は他なし、三箇の短所を有するによる。曰く人口の增殖、サキソン人種に及ばざるなり。曰く羅馬類似の武力的殖民主義を取るに在り。曰く佛人の快樂、戸外に重くして、家庭に輕く、隨て家族的殖民に適ざるに在り。英人が殖民に成功多きは、三者に於て佛人と相反するによる。英人の家庭を重ずるは、他國人の上に在り。是れ我日本國人夢想の及ばざる所なり。英人が其家族を携へて他鄕に移るに、苟も其犯されざる一家を建て、團欒の樂を家庭に取るを得ば、天外地角、皆彼等の樂鄕と感ずるが如し。其仰で天に事へ、俯して妻子を養ひ、能く精神行爲の自由を全くするを得ば、興圖の上、皆天與の住所と想ふの概あり、唯此性質あり。花の如き龍動の繁盛を顧みずして、印度の熱地に赴き、キャナダの曠野に住し、萬

里の鯨波を截りて南島の濠洲に安居し、到處其家族的膨脹を遂ぐるを得。之を佛人が海外に出で、巴里の不夜城を回顧し、珈琲店倶樂部劇場の如き戸外快樂に乏きを嘆ずるに比するに、殖民的性質を有するは果して何れに在るや。予輩故に此三百年間、二國殖民の成敗を論じて、之を武力の競爭に歸すること能はざるなり。

我日本民族は、是等の點に於て果して如何の性質を有する乎。其蕃息力を有するは、之を拉丁民族を比して、稍賴母敷所あるを覺ふ。然れ共蕃息の一事を以て、國民の膨脹殖民の大助と爲すに足らず。平和的勞働的家族的自主的の性質、之に伴ふに非れば、一時海外に溢出突進するも、永久に何の功なく、結局島國有限の地に、無限の蕃息を遂ぐるに苦まんとす。是れ蕃息の一事を賴む可からざる所以なり。而して是等の性質を調査するに、惜かな、日本民族從來の傾向は、皆其要件に適當せず。是れ識者が永年の國運を開く爲めに、健全なる思想を國民に喚起して、先づ其舊想を一變し、其行爲を指導するの要ある所以なり。

第八　勞働者。娼婦

我國民は、眞正の意義に於て未だ殖民の字義を解せず。他國に流出する人口あれば、直ちに此文字を適用せんとす。卽ち出稼人夫を以て移民と稱し、之を媒介する會社を、移民會社と稱するが如し。普通の智識を有し、稼行の資本を懷きて、海外に事業を經營せんとする者の外出は、吾人實に之を慶す。資本なきも、眞正の勞働に服し、又目立の志氣を有する者の外出は、吾人之を慶す。此志氣もなく、資本もなく、又契約の眞義を了解するの智識無く、誘惑的契約を以て、輸出せらるゝ勞働者は、利害殆んど如何を知らず。彼等は媒介者に暴利を占められ、不利の契約に束縛せられ、媒介者は初めに暴利を占むるを以て、目的を達したる者の如く、爾後勞働者の利益自由安寧を絕へず注意せざるが爲に、彼等意外の悲境に陷ることあり、緊束を受くることあり、多くの死亡者を出すことあり。且此の利害を識別する程度以下の

勞働者は、其人格卑さを以て、亂行破約、行使者に牛馬使せらるゝに至り、日本民族の信用を輕せしむる結果を招くことあり。日本人の出稼に反對する氣焰、年々に高まるは、一面は勞働の競爭より起り、一面は風俗卑陋なりとの論議より來る。現時の所謂移民は、一時の勞力を賣る者にして、我人口增加を救濟する永久の殖民とは、何の關係あらざるなり。就中其陋劣なる媒介者の輸出する出稼は、却て他年眞正殖民の妨害たらんとす。

然れ共眞正殖民の妨害たるべきは、醜業婦の出稼に如くはなし。此點に於ては世界各國、我日本の如き卑陋の者あらざるべし。歐米人は黑人を賤み、又支那人を蔑する習性を有す。然れども黑人支那人は、其婦女を誘拐して、之を萬國市場の物品とするに至らず。然るに櫻國の男兒、君子國の丈夫は、其同胞姉妹を誘拐し去り、之を異人種の玩弄に供し、得々として羞ざるに至る。西南は支那海南洋印度より、北は西比利亞の原野に及ぶまで、苟も娼婦としいへば、日本の產物と理會せらるゝは

現時の狀態なり。是れ其初めは無智の少婦を誘拐し、之に擔はしむるに、重き負債を以てし、之を束縛し、奴使し、慣習此に成りて、此娼奴を產出するものとす。無識の論者は、唯人口の外出を以て、殖民の先驅と誤解するが故に、娼婦の出稼も、亦他年殖民の地たらんと想ふ者無きに非ず。是れ甚き陋見なり。予輩は平和的膨脹を主張するの故を以て、武力的膨脹に反對し、家族約膨脹を主張ずるの故を以て娼婦と奴隸の出稼を非認す。彼の非理の契約によりて、無智の人夫を外出し、誘拐の手段によりて。婦女を外出するは、眞正殖民の原理と相反する者なり。何となれば共に家族的膨脹を妨害するの結果を生すればなり。

予輩は永年の大策として、殖民を主張する者なり。其地は支那西比利亞の大陸あり、南米諸國の原野あり、拓きて住すべく、留りて蕃息すべし、吾人豈其地の無きを患へんや。唯我民族に家庭を重ずるの風習なく、永年安居を建つるの遠思なし。平和的家族的膨脹の意義を解せずして、却て之を破壞する人口の流出を飽稱す。是れ其

好果を得ざる所以にして、其患は全く内に存し、曾て外に在らざるなり。予輩故に今日内外の急務を談ずるに當り、終に各人の高志、家庭の清潔、風俗の淳厚を望むの論旨に歸著せざること能はざるなり。

島田三郎全集（第四卷終）

大正十四年四月十五日印刷
大正十四年四月十八日發行

島田三郎全集
第四卷

島田三郎全集刊行會代表者
編纂者　吉野作造

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者　福永文之助

東京市京橋區日吉町
印刷者　渡邊爲藏

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行所　島田三郎全集刊行會

版權所有

定價四圓

發賣所
東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警醒社書店
振替東京五五三番

島田三郎全集

第一卷　議會演說集（既刊）　石川安次郎編
第二卷　社會教育論集（既刊）　山室軍平編
第三卷　開國始末　井伊大老傳（既刊）　木下尙江校訂
第四卷　政教史論（既刊）　木下尙江編
第五卷　社會主義と日本改造（表題未定）　木下尙江編
第六卷　明治憲政史　吉野作造編
第七卷　論文及書簡集　吉野作造・内ケ崎作三郎編

□全集の外に島田三郎傳（編纂主任吉野作造）を編纂するに付先生の隱れたる論策、書簡並に逸話其他の資料を普ねく蒐集したきに付寄贈又は貸與の方法により先生生前の知人諸氏の協力を希望します、

（照會先、東京・京橋・警醒社内　島田三郎全集刊行會）

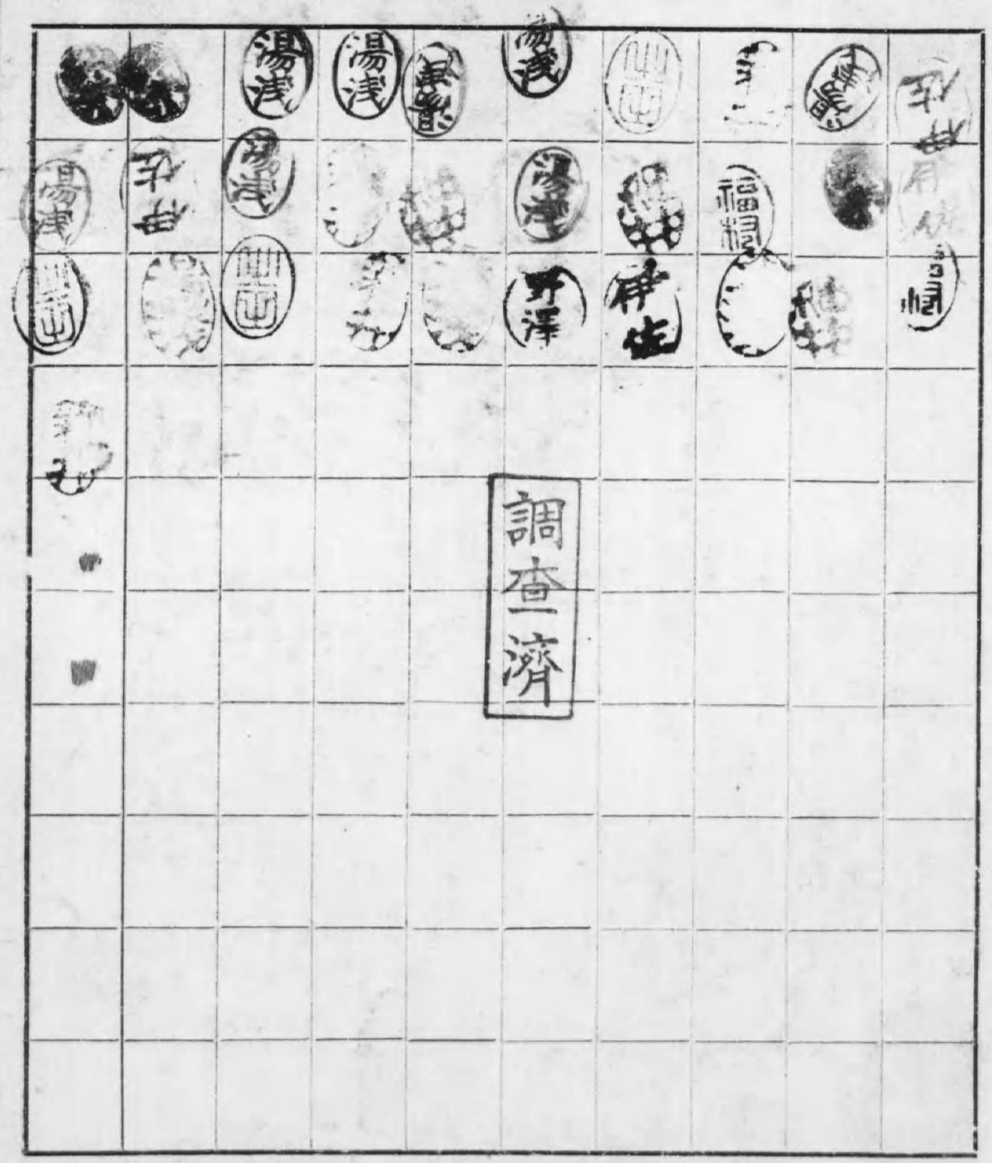
發行順次分賣

四六版五百餘頁
羽二重天金函入

定價各冊四圓
送料書留廿四錢

527
28

14年 7月 21日



終